

60  
765

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>16</sup>m 1 2 3 4 5

始





痲疾

溫  
療  
法  
全  
書



大正

13. 8. 11

内交

60-765

## 序 言

古來醫書の種類。數多しと雖も、其總ては、斯學の專攻を、目的と爲るものにして、局外者の視視に適はず、従つて之を購讀せんとするも、素人の理解、易からざるものあり。故に殊更購ふて觀る者、殆ど罕にして、爲に病理上の智識を缺き、自己の生命は、全く醫師の匙加減に委するが如く、其多くは症徵時を蔑視して、恐るべき前徵の迫るも、豫知するを得ず、自ら重態に陥る者あり、或は療法の撰擇を謬りて、遂に致命的、原因を招來する者、擧て數ふべからざるなり。

人誰か疾病を怖れざる者あらんや、是を防ぎ之を癒するの道、亦安全を欲せざる者あらざるべし。されど是れを望むに、其準據すべき、何物かを有せざるべからず

即ち通俗的醫書に據りて、病理を會得し、自ら症徴を識別し、其禁忌適應を辨へ、適切なる處置療法に、時を逸せざれば、疾病末發の内に抑制し、療法の撰擇據て、錯誤なからしむるものと、思惟するなり。

今や斯學の發達は、其微を究め、其幽を闡拓して、増々局外者に、之が纖密なる研究を、許さざるものありと雖も、梗概的病理の、一端を識るは、自己の生命を護るに、必要缺くべからざるなり。

不肖夙に通俗的、醫書の編纂を夢想する事、屢々成りと雖も、淺學寡聞にして、企圖を全ふせんとするに、及ばざるも あり。爾來念を斷つて、久しく顧ざりしが今回特に逸すべからざる、機會に遭遇して、爰に此療法の摘要を、發表せんとす。蓋し匆卒の間に執筆せし爲、冊子の内容に精密の望みがたきものあるを、遺憾とす

されど、嘗て家傳として、獨占的に秘守せし、此療法の意義、亦其蘊奥を究むるもの今や自己を於て、他に需むべからざるものあり。従つて其責任、自ら重且大なるを感じ、此際文の拙なるを顧慮し、企望を空しくすべきにあらず。非才其任にあらざるも、勇を鼓して、初企の目的を、貫徹せんとするなり。

著者の親族に當り、嘗て痔疾梅毒を専門とし、貳百有餘年の實驗を有し、一種獨得の治療術を以て一貫し、一家相傳の秘法として、遍く世に知られたるも、院主歿後醫籍消滅し、後繼者幼手の故を以て、一旦廢業止むなしとせしも、周圍の事情將來の利害等、其繼續を是とするものあり。遺族近親より懇請を齎し、予に囑するに此重任を以てす。不肖其任に適せずと雖も、亦近親の一人として、固辭するに忍びず。爾來其跡を繼承し、明治三十九年二月以來、大正九年八月に至る、十五ヶ年間

開營業を續けたるも、不幸にして後繼者を出す能はず。加之不祥相踵で起り。遂に土地家屋を賣却し、今は全く昔日の幻影だも留めざる、悲涼に陥りたり。蓋し世に比類なき、此療法を知らるゝ、舊患者諸君より、是れが泯絶せん事を惜み、再起を促さる事切なるものあり、去れど予其舉に出する、資力あらざるを遺憾とせしに、今回天神橋一丁目大原宇之助氏の、熱心なる勸告に基し、平野町一丁目瀧口久太郎氏高津三番町秋岡重兵衛氏、堂島中町二丁目近藤一郎氏、高津九番町山田清次郎氏其他篤志者の御後援、相繼で起り、此機會を得たる不肖の面目、詎ぞ之に過ぐるものあらんや。

予嚮に電氣應用、痔疾温療機を發明し、大正元年以來、全く舊時の面目を一新し加之藥品處置等補正する處亦少からず。然れども日新月异の趨勢は、固とり之を以

て満足すべきにあらず、今回此舉に際して、更に工夫を凝し、輕便なる素人専用、温療器の考案成りたるを以て、是れが説明を付記し、明治卅九年來の研究と、實驗より得たる長處を補足し、以て此痔疾温療法を諸君の前に披瀝し、現今世間に行ひつゝある。一般施術に比較して、其如何なる點が、安全且容易なりとするやは、讀者の判斷に委し、些自己の處信を、爰に編述して、長へに此療法を傳へ、一は刀圭家の參考に供し一は素人に對する。此種智識の向上に資せんとする。微意に外ならざるなり。

此冊子は大原宇之助氏、其他篤志の御後援に據り、寄贈を受けたる部數に限り、無償提供せんとする、企望なるも、志望者漸時其數を加ふる時、經費僅少ならざるを思ふ爲に、素人に必要以外の事は、可成的省略せんとす。爲に臨床家諸君の參考

上不備なる點なしとせざるも、素人に誤解を招き易き部分は、却つて有害なるを以て省略する事とせり。

六

素人は總て、家傳とか特效藥とか、文飾的商策的能書に信頼し、盲從せんとするも、痔は何に據て生ずるか、其生理的病原を知り、是を癒するに、如何なる手段を必要とすべきか、多少病理に通ずる處あるならば、豈商策的空理に、盲從するの理あらんや。

假に痔疾が、服藥亦是膏藥に據て、無痛且容易に癒る如き、効能を以て爲すものあるも、自己症狀の輕重難易、適應禁忌に鑑別の明あらば、文飾商策の能書は、一嘘にも價せざるなり。蓋し如此藥品の存否、亦賣藥として、能ふべからざるを、知り得るを以てなり。

今著者が、公にせんとする療法にも、家傳とする藥品數種あり。されど其藥品を服用し、亦貼用して、如何なる難症も、根治すべき性質のものにあらず。藥品其物は、外科的處置に、伴ふて必要を生じ、亦効を收めんとするなり。故に醫育を受けたる、臨床家に示して、格別異常の價值あるものにあらず、之を素人に教ふるも、調劑不可能にして、却て重大なる過失を醸す、虞れなしとせず、されど其藥品を公にせざれば、是亦一種商策の誹り、遁れがたきを遺憾として、此發表を躊躇せしも斯くて其企圖を、空しくすべきにあらず。藥品は之を賣藥となし、療器と共に、諸君の需めに應すべき、道を開拓するは、蓋し商的營利を、專旨するものにあらず、却て有効に裨益する處となり、延ては後援者の意圖に適ひ、著者も亦益する處あらんとし、此冊子を述作せしも、素より井底の蛙、編者たるの器にあらざれば、隔

七

靴搔痒の感、免がれ難きを遺憾とす、幸厘毛の益するあらば、後援者は元より不肖  
の本望何物か加之哉。

八

大正十三甲子年初夏生玉於陋屋

編 者 識

# 痔疾温療法全書目次

## 第一篇

### 第一章

- 一、脱肛に對する概論……………一
- 一、痔核の原因及症候……………六
- 一、第一圖痔核潜在之断面圖……………九
- 一、第二圖痔核嵌頓之断面圖……………一一
- 一、痔核遺傳の素因……………一二
- 一、第三圖痔核脱肛……………一三

二

- 一、急性痔核及其症候……………三
- 一、切痔の起る原因及症候……………四
- 一、第四圖有核者の肛外鬱血及便通時の視出……………一五
- 一、第五圖肛外隆起物第六圖其萎縮及自然吸收より出する瘻……………一七
- 一、痔出血及其症候……………一八
- 一、溫療法は重症なる痔核に適す……………二二
- 一、痔核嵌頓療法の安全なる理由……………二七
- 一、痔核に對する一般的療法の概略……………三三
- 其一、燒灼法……………三三
- 其二、腐蝕法……………三三

- 其三、結紮法……………三五
- 其四、癩痕結成を利用する制脫法……………三七
- 其五、注射法……………三八
- 一、症候的處置に就て……………四〇

第二章

- 一、痔瘻に對する概論……………四一
- 一、痔瘻の起る原因及症候……………四六
- 一、痔瘻の手術に就て……………五六
- 一、手術後結果不良とする痔瘻に就て……………六〇
- 一、第七圖 潜在痔核と併發する瘻竈の斷面圖……………六一



一、第八圖 瘻竈の断面圖……………四

### 第三章

一、濕痔に對する概論……………六九

一、微毒と痔の區別に就て……………七一

一、第九圖扁平濕疣と濕性贅肉及軟硬混合潰瘍……………七五

一、微毒第一第二第三期症候に就て……………七五

一、第一〇圖軟性下疳……………七六

一、第一一圖硬性下疳……………七九

一、軟硬下疳の併發症に就て……………八二

### 第四章

一、疣痔に對する概論……………八六

一、第一二圖肛外隆起物……………八六

一、疣痔の生ずる原因及症候……………八九

一、第一三圖軟硬併發疣痔……………九〇

一、第一四圖痔核に増殖する軟性疣……………九一

### 第五章

一、痒痔に對する概論……………九二

一、第一五圖痒痔……………九三

一、病原體を爲す微生物に就て……………九四

### 第六章

一、腸痔「一名直腸脱」の原因及症候 ..... 一〇〇  
 一、第一六圖直腸の脱出 ..... 一〇〇

**第二篇**

**第一章**

一、痔核嵌頓療法 ..... 一〇一  
 一、痔核が嵌頓療法に適當とする症候時 ..... 一〇一  
 一、溫療法が痔核に及ぼす作用 ..... 一〇〇  
 一、安永膏使用に就て ..... 一〇三  
**第二章**  
 一、溫療法が痔瘻に及ぼす作用 ..... 一一六

一、溫療法に食事制度を必要とせざる理由 ..... 一二七  
 一、治癒機轉に就て ..... 一二四

**第三章**

一、溫療法が濕痔に及ぼす作用 ..... 一三六  
 一、微毒の適薬に就て ..... 一三二  
 一、局處的療法に就て ..... 一三五

**第四章**

一、溫療法が疣痔に及ぼす作用 ..... 一三七

**第五章**

一、溫療法が痒痔に及ぼす作用 ..... 一三九

一、腸痔の制脱に就て……………一四二

附 録

一、温療に要する藥品及器具……………一四五

一、藥品及器具の使用法……………一四六

一、第一七圖温療器使用の圖……………一四七

一、第一號電氣温療器使用の圖……………一四八

一、第二號素人専用温療器……………一四九

一、療養中の攝生に就て……………一四九

一、第三號素人専用温療器……………一五〇

痔疾温療法全書目次終

痔疾温療法全書

第一編

第一章 脱肛に對する概論

痔疾には脱肛が一番多く、亦一番難症とするのであります。子孫に遺傳すと言ふも此脱肛で、昔から痔は切るものでないと、俗に言ひ傳へて居るも、此脱肛であります。施術の結果不幸なる、終焉を遂げたと言つて、世間から怖れられて居るも、此脱肛で、専門醫家が適當なる、治療法の發見に、今尙苦心して居らるゝも、此脱肛であります。

二  
焼灼法、結紮法、腐蝕法、注射法及癩痕結成に據る。制脱法等、現今一般に行はれ宛ある治療法は、其種類多しとすれど、何れに據るも、是が安全であり、亦完全であると言ふ域に達し居ると言ふ譯ではないのであります。寧安全を希望するならば、其治療を圖らないのが、却つて安全であると、思惟されるのであります。

茲に適例があります。昨年八月某國務大臣が、痔核の爲に薨去されました、當時各地の新聞紙に、其病狀經過等の發表がありましたから、一般によく御承知の筈で、殊に最近の事實でありましたから、未だ記憶にも存せらるゝ事と思ひます。此御方の直接死の原因は、出血であります。有名なる専門國手の方々が、手を盡して治療を圖つたのであるから、別に何等の手落があつた譯ではありません、痔核に對する。當然の處置を行はれたに違ひないのであります。然して其死は當然であるべき

處置の爲に、死期を早めた事になるので、若此御方が、便通時に訴へる苦痛を忍び何等の處置を求めなかつたなれば、今猶存命さるゝに違ひないのであります。畢竟公務を執る事が、出來得ない爲に、治療を受けられたので、外に原因する。致命的疾病が無かつたとすれば、其處置療法が、安全な手當で、無かつた事を證するのであります。

元來痔核には、出血の危険性を持つております。止血が完全に行ひ得る性質のものであるなれば、決して間違を生ぜしめないものであります。畢竟、痔核出血の際に處する完全な、止血手段の無い事が、是に因て、素人の方にも、能く了解の出來得る事と、思惟されるのであります。

如此例は、世間に餘り珍らしくありません。唯身分の相違に據て、其傳噂が大

四  
きく響くと、否らざるとに過ぎぬのであります、快復を圖る目的が、其結果に於て、  
往々矛盾したる。不諱を齎らす怖れある爲、無暗に、治療を懼れらるゝものであり  
ます。

今茲に、著者が、素人にも安全に出來得る、治療術を公にせんと志すもの、即  
此脱肛が、主なる目的であります。前述の如き不安が伴ふて、治療を受くるに躊躇  
し、生涯公務家業を怠り、常に此疾病に悩んで居る方が、尠からぬのであります。  
前記の如き方々が其病苦から遁れて愉快に活動の出來得る殊に安全なる治療術を  
秘守して一日も看過すべからざるものであると、思惟するのが、此療法を公にす  
る所以であり、亦不肖の此舉に、御後援下さる篤志も、爰に其意義を存するのであ  
ります。

而して此療法にも、手術を必要とするものがあります。其處置格別危険を有する  
にあらざるも、唯痔核の症状を鑑別し、處置の適不適を識別して時期到れりとす  
るか、否やの判断が唯一二の痔核に就て、誰にも了解し得る如く、説明に據つて悉  
し得べからざるものであります。若時期の未だ到らざる時、或は不適とする痔核に  
對し行ふ時は多少の危険なしとせざるを以て、其手段方法を爰に省略するが安全  
なるものと、思惟されるのであります。

而して脱肛とは文字の示す如く、肛門の一部脱出するが故に此稱をなすものにし  
て腸痔と稱へ小兒に多く直腸の脱出するのがあります。夫は今爰に述ぶる脱肛と  
は、大に性質を異にするが故に其説明は後章に譲り、今説明せんとするもの、即  
痔核から招來する脱肛であります。

痔核の原因及症候

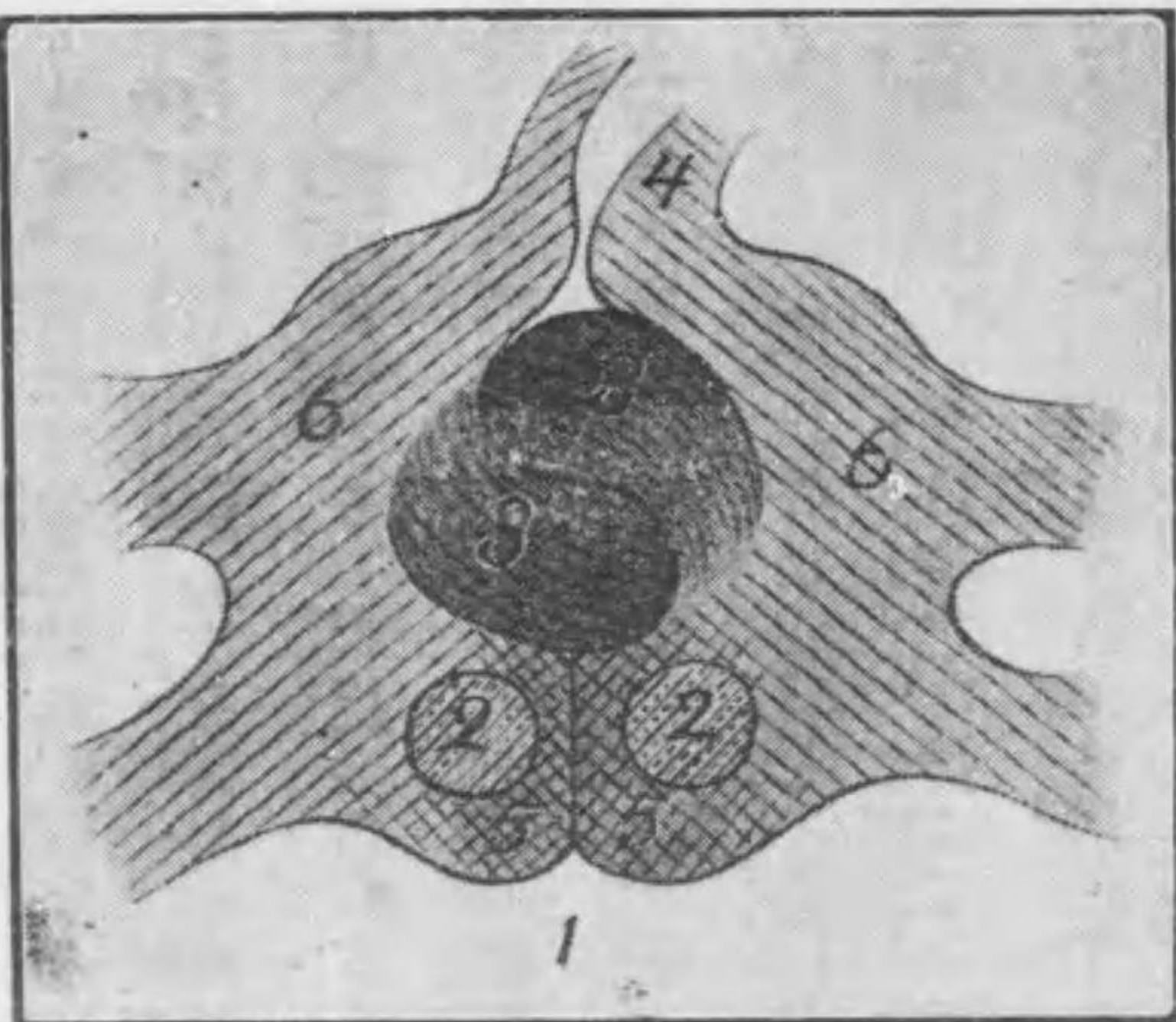
痔核とは、肛門内部粘膜に生ずる靜脈擴張で、毛細血管の集團したる。瘤の如き隆起物を云ふのであります。此隆起物が、年と共に漸次膨脹して、便通の障礙となり、糞塊に押されて肛外に脱出し、括約筋の壓迫を受けて疼痛するのであります。其質軟弱にして、鮮紅色、暗紅色、帶紫色等があります。其暗紅色、帶紫色のものは、壯年時代に多く、三拾歳以上に至つて、殆ど鮮紅色と成り、糞塊其他之に混ざる固形物の擦過に創付き、其損傷輕微なるも、多量の出血を招くものにして、爲に致命の原因を爲し、或は貧血症に陥り、腦又は心臟の障礙を誘發するのであります。而して、此症の發生する原因は、其機會を異にするものあれど、血行障礙が主因を爲すものであります。

肛圍及其内部には、常に血行障礙を來す、種々の機會が伴ひ易く、其最も重なるものは、便秘であります。便秘は肛内に糞塊を堆積し、血管其壓迫を受け、狹窄或は閉塞さるゝ爲に動脈充血となり、亦靜脈の還流障礙となつて血液の鬱滯を餘義なくするのであります。殊に靜脈は、其管壁が薄弱である爲僅の壓迫にも容易に閉塞されるのであります。其障礙久しければ、血液爰に蓄積し、管壁爲に膨脹して、血液は管外に溢れ、甚しきは破裂を生じ、而して血液は。粘膜組織に滲透して。爰に集積さるゝのであります。此際肛内粘膜は。其溢血を。吸收せしむべき。幫助器官に。缺ぐる爲。遂に本管との。分岐聯絡を爲し。而して集團的。毛細血管と成り。爰に痔核を。形成するものであります。暗紅色。帶紫色の痔核が。壯年時代に多きは、其溢血が未だ、時日の經過を缺ぐものにして毛細管を形成するに

猶充分ならざるものであります。殊に其帶紫色のものは。溢血未だ日淺きを。證するものにして。此際血行障礙を除き。溢血の吸収を補助するに。適當な手段を。行ひ得るならば。殆ど其痕跡を。留めざる程度に。吸収するのであります。肛内に於て。其手段なきを、遺憾とするものであります。

肛圍に黒く、痣に似たる。結節状を認むる事あり。所謂出血間もなくして。其障礙が除かれ。自然の吸収に因つて。其症跡に。色素の殘留したるものにして。第五第六圖に。黒點を以て示すもの。即其症跡であります。されど此自然吸収は。肛内粘膜に原發する。痔核に於て望むべからず。之其外壁軟弱なるが故にして。其吸収を補助するに。適當な壓力を。缺ぐからであります。故に主として。肛外殊に肛孔近く發生する。溢血性隆起物に。多く實現するを。認むるのであります。即ち

第一圖 痔核在之斷面圖



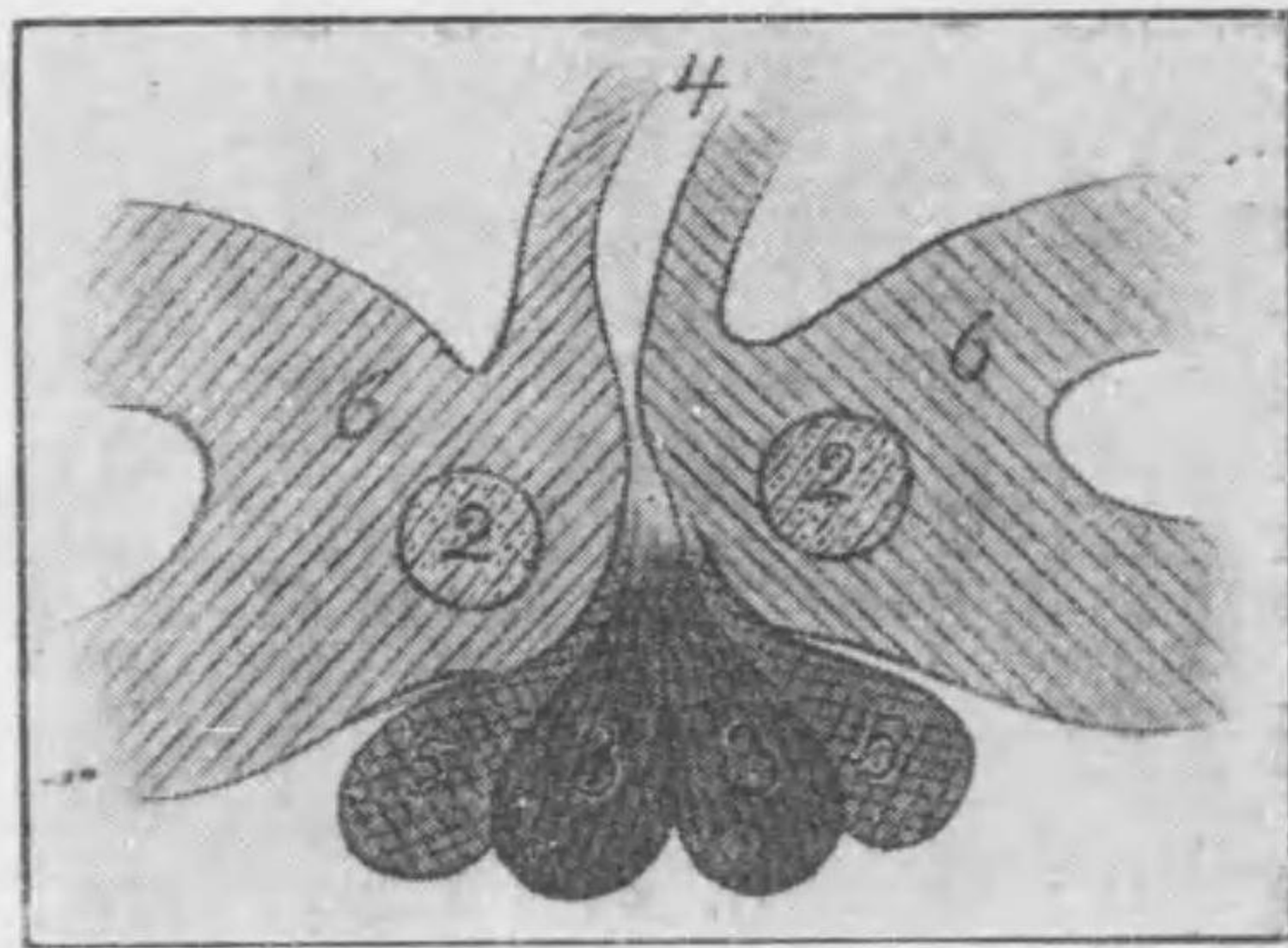
- 1 肛門
- 2 括約筋
- 3 痔核
- 4 直腸
- 5 壁血
- 6 組織

強き外皮の壓力と。括約筋の緊縮。據て之に力を添へる爲に。自ら其吸収を。容易ならしむるのであります。

而して慢性症たる痔核は。肛内粘膜の一部に發生して。其位置が。自然吸収の補助器官に缺ぐるを。症因と爲すものにして。初期の症徴として。何等の苦痛を感ずるものにあらず。故に其初期は。何日であるかを知り。得べからざるものであります。然して下痢。或は後重便秘等の。繼續的刺戟に會ひて。漸次焮腫の度を加へ。遂に便

通の障碍を爲すに到つて。肛内にはそれが潜在を許さず。糞塊の爲に。押出さるゝのであります。普通は皆此時に、苦痛を感じ。初めて痔を知るのであります。既に幾年か以前に於て。症徴を爲し。次第に發達して。爰に到るのであります。故に痔核は、便通を妨ぐる、程度にあらざれば、苦痛を感ずる、原因とは成らないのであります。苦痛は、所謂、括約筋の緊縛から生ずるものにして、其疼痛は亦隣接血管の障碍と成り、若し爰に動脈管を閉塞する事あらば、其脈波は遂に、毛細管を通じて、**静脈**本管に逆行し、既に還流停滞する、静脈血と相混じて、増々局部に血流量を加へ、漿液亦之に伴ふて、腫脹膨大し、第三圖に示す如き、形状を爲すのであります。痔核が内部に潜在する時、排便の容易ならざるは、第一圖を参照して、首肯し得らるゝのであります。即ち便通は痔核の脱出を、餘義なくせしむる

第二圖 痔核嵌頓の断面圖



- 4 1 直肛門
- 5 2 括約筋
- 6 3 痔核
- 7 4 組織

ものにして、之を稱して脱肛の、名を爲す所以であります。亦其慢性症たる、隆起物を指して、痔核と稱へるので、第二圖の参照等相俟て、痔核の性状原因が概略了解出来るものと、考へるのであります。其之が發生する。原因に到つては、僅に一條の血管障碍から、因は果を爲し、果は因を爲して、遂に茲に至る事を、怖れねばならぬのであります。亦痔核の形状位置等に、差異ありて、治療

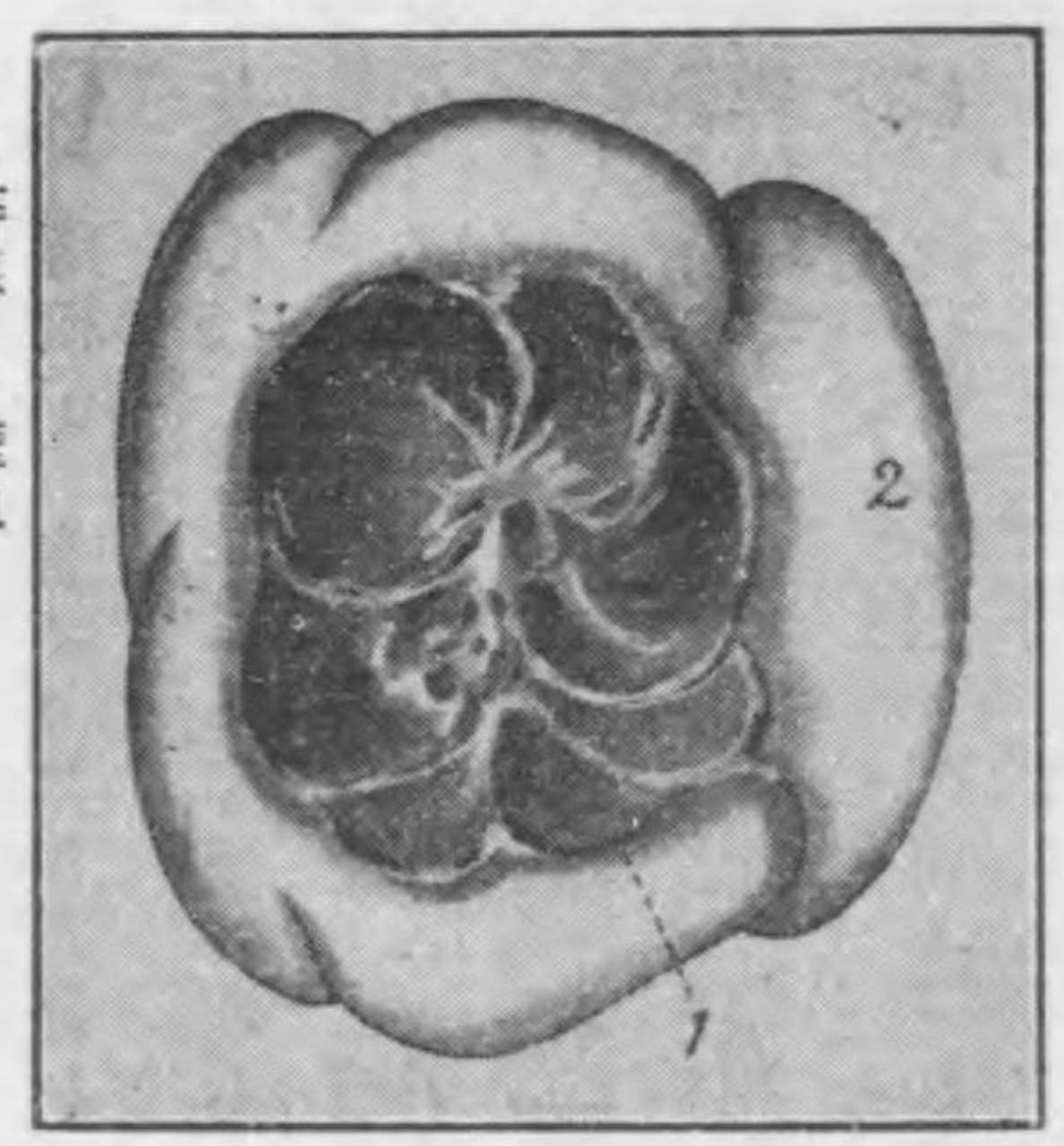


上大變不幸を生ずるものにして。核の大なるを以て、難症とすべきにあらず。唯其位置形状に因て、決するものであります。

### 痔核遺傳の素因

痔核が前述の如き、血行障礙に、由來するものとせば、遺傳性は、何を以て素因とするか。學若の説種々ありとすれど、血管の軟弱なる、體質遺傳と認むるを、安當と思惟するのであります。而して肛門の存在する、位置、及形状等が顔面の人毎に差異、あるが如く。是を専門的に注意する時、初めて首肯し、得らるゝのであります。故に周囲の壓迫、殊に受け易きものと、否らざるものとを生じ、前記體質遺傳と相俟て、顔面の祖先に彷彿たる如く、血管の位置、管壁の軟弱、因て生ずる結果の、同一なるを稱して、遺傳と名付くるのであります。痔核に特種の病毒を

第三圖 痔核脫肛



1 痔核 2 體血

### 急性痔核及其症候

遺傳的素質に據らず、日常生活の状態より、便秘を招來し。堅き糞塊を押し出す際、肛門に存在する血管が皮下に破れ、血液組織に滲出溜血して痔核に類似の隆起物を偶發する事あり。亦下痢頻繁なる時、或は度々上圍するも裏急後重する時。

有し、之を子孫に傳へるの、意ではないのであります。併して先天的梅毒。此症を助成する處なしとせざるも、之を以て痔核遺傳症因と爲すは、妥當ならざるものと思惟するのであります。

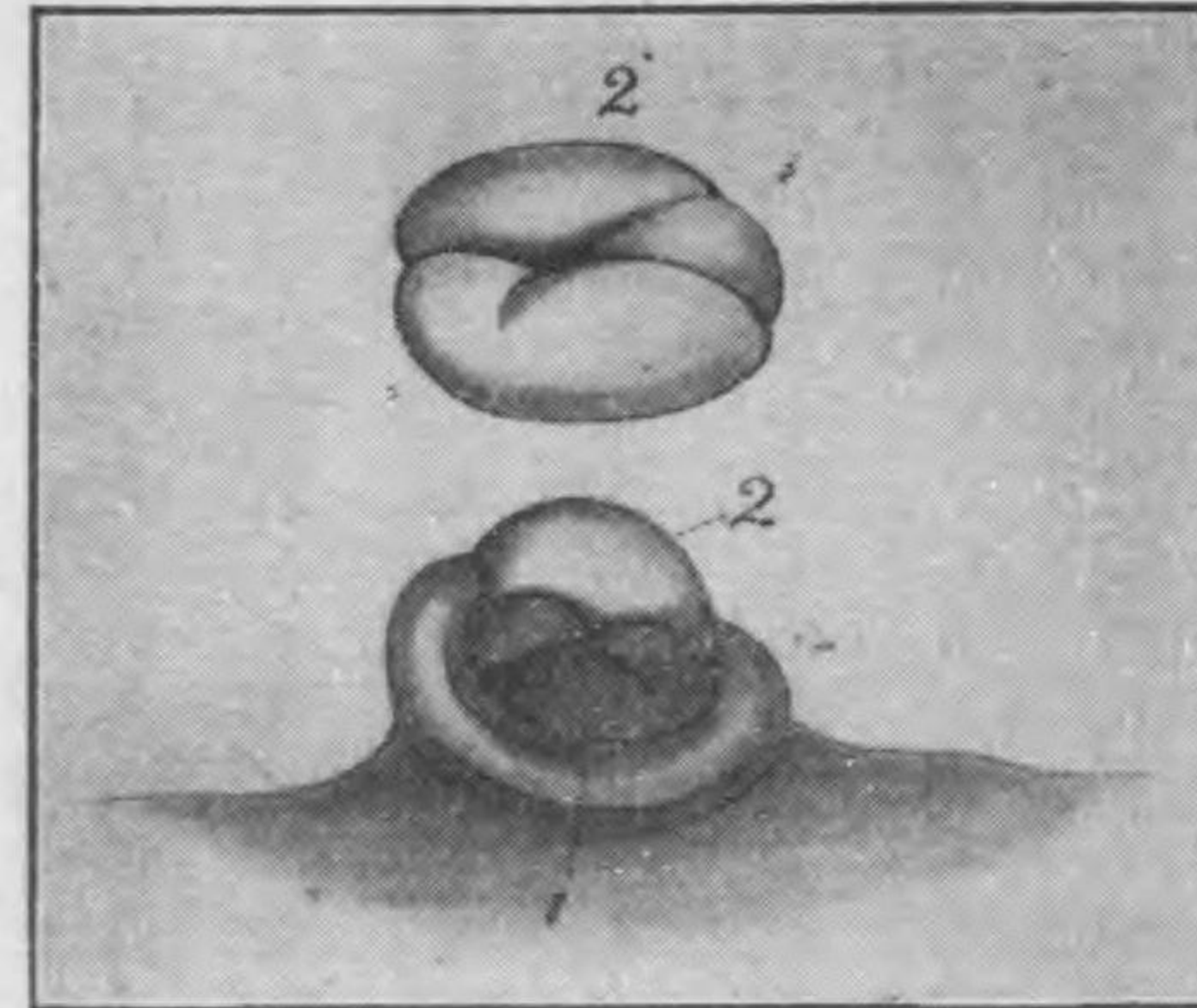
肛圍は是れが刺戟に因て焮腫し、前者と同一症候を呈する事あり。其腫脹部が、四  
五日にして消散するものと、慢性痔核の症因を爲すあり。或は炎症を誘發して、化  
濃するあり。其炎症時を肛門周圍炎と稱へ、化濃崩壊したるものを痔瘻と稱へるの  
であります。

偶發性痔核が、前記の如き機會を。症因とする爲め、其多くが、肛孔近く、發生  
するものにして。即ち外痔核の稱あり。遺傳其他の症因に關る慢性症が、内部粘膜  
に發生する爲め、内痔核と稱へ。内外痔核の名稱、因て生ずる所以であります。

切痔の起る原因及症候

便通時固き糞塊を押し出す際、限局肛圍の開孔、其度に過ぐるものある時、粘膜の  
一部は、爲に裂創を爲す事あり。因て切痔の稱を爲すものにして。其發生は主とし

第四圖 痔核排便時及其鬱血



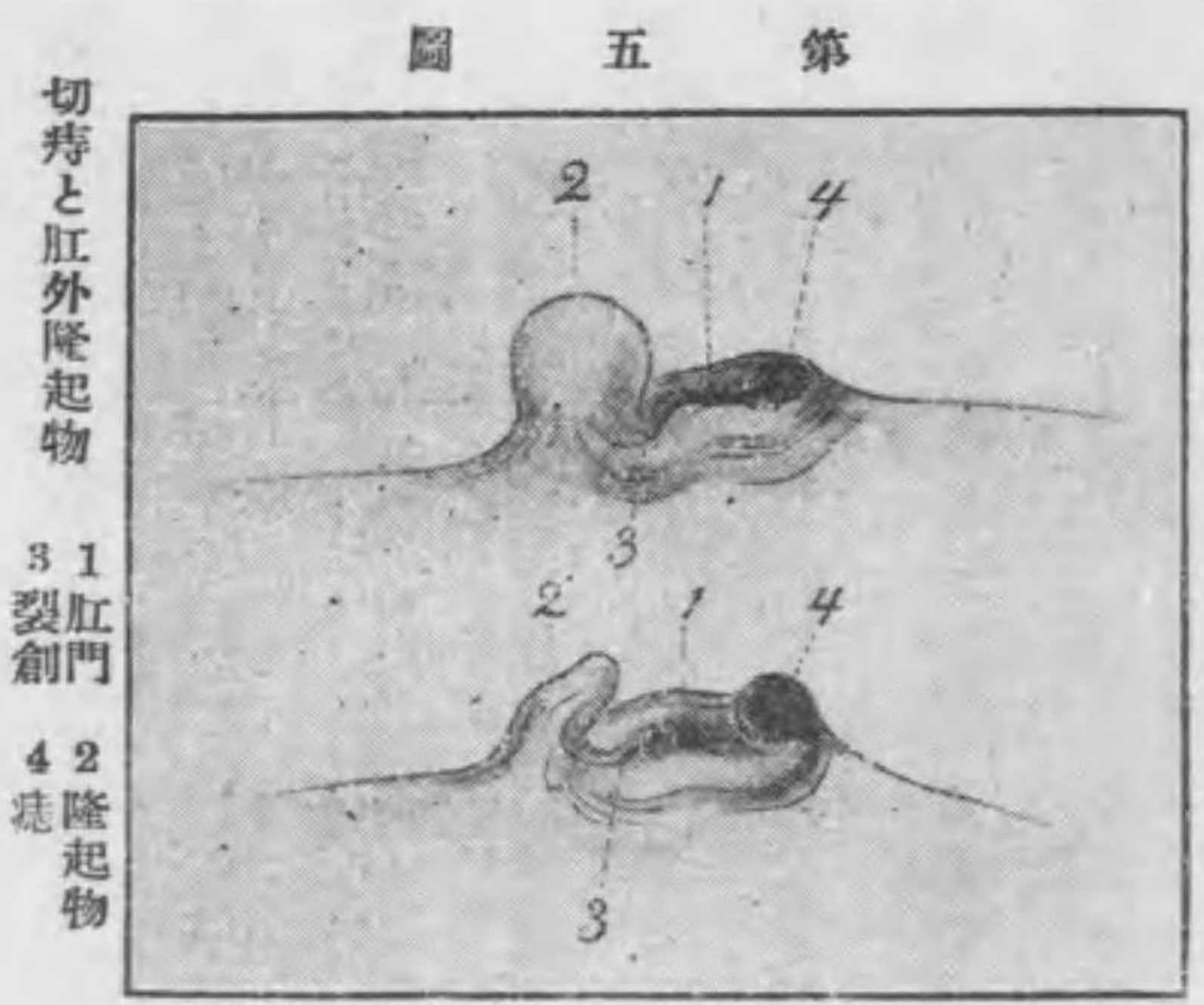
て、鬱血及充血時に於て、原發を容易ならしむるものであります。

彼の臨月時胎兒の壓迫、出産時或は便秘座職等。血行障碍の頻發。繼續的刺戟等  
に由來して。鬱血充血亦是に伴ひ、裂創の症  
因其宜に適ふものにして、此症殊に婦人に多  
いのであります。

前記痔核の發生する原因の、説明中に詳記  
する如く、血行障碍に據る血液の停滞が、痔  
核を形成し、或は其鬱血が、組織細胞に變化  
を與へて。遂に壞死敗類せしめ、爰に痔瘻の  
症因と成る事があります。此際に於て、皮膚

組織の破壊、即ち裂創の自發は。痔瘻及痔核の症因を、未然の内に除くものにして、此意味に於て、裂創は自然的豫防と、成るのであります。即ち溜血が是れによつて除去されるからであります。裂創生ぜざる時、痔瘻痔核、其何れか通るべからざる運命に遭遇して居るのでありますが、裂創は幸に其症因を除き、血行亦之に因て其障碍を解放さるゝのであります。此恩惠的裂創の癒合を圖る事が、一方に於ては痔核痔瘻の症因を招く感なしとせざるも、其創内には、常に汚物を含蓄し、之が刺戟に與て神経過敏となり、劇痛亦忍びがたきものであります。殊に該創面は往々にして、諸種の細菌に侵され易く。因て痔瘻の原因を、招くものであります。裂創久しき時、下層末だ癒へざるに。上層被膜を爲す事あり。而して被膜の下層に残る創内には、緩慢なる膿瘍を營み。延て肛口に小隆起を生じ、時として、指頭

大に膨脹し、疼痛を訴ふるものであります。第五圖は則ち其腫脹期を示したるものにして、此腫脹は亦前記裂創の被膜を、餘義なく破壊せしむるものにして、其破壊



第六圖

は腫脹部の萎縮となり。第六圖の如く、内部の空虚なる皮膜のみを残留し、裂創被膜すれば、是れが腫脹を招來し、裂創は亦是れより出す、分泌物の爲に、常に其癒合を妨げらるゝ等、幾度か反覆する内、次第に大を爲し、放擲して自然に委するあらば容易に終熄の期なからしむるものであります。

第六圖隆起物の開口部は、侵蝕に基因するが故に、常に裂創と相對して、肛内に向つて開口し、肛外に而しては、孔口を爲さないであります。其腫脹期は、亦よく血行障害を伴ふ爲、往々痔瘻を誘發するものであります。

痔出血及其症候

痔の出血は、習慣的に痔核の緊脹時、必ず出血を見るものあり。其原因として痔核の形狀が、便の擦過に傷付易く、其位置亦是に適するが故にして。痔核緊脹時に多く、此症を爲すものであります。出血僅に點落して、四五日或は、永くも一二週間の後。自然的に止血する程度なれば。爲に痔核の緊脹を、緩和する意味に適ふものにして、格別顧慮するに足らざるも、飛散する出血は、僅の期間にも、能く多量の血液を失ひ、亦容易に止血せざるものにして、爲に貧血症に陥り、餘病を招來

するものであります。

痔核は出血に因て、其病體を爲す隆起物が、自滅するものではありません。即ち爰に填充する血液は、靜脈本管との、聯絡を爲すが故にして、負傷の程度に據つては、全身の血液を失ふものであります。素人が蛭を以て吸血を圖るものあれど、何等の効を爲さないであります。而して少量なる滲出、點落的出血は、痔核を萎靡縮少せしむる、作用ありとするも、根本療法に對しては、自ら遠ざかるものであります。即ち痔核の焮腫、發達を阻止する爲に、肛外脱出は殆ど罕にして、便通時僅に肛孔を覗く事あるも、排泄後は、直に、復納するが故に、是れを外部に嵌屯せしむる事が、不可能とするものであります。第四圖は便通時の脱出にして、一は鬱血、一は痔核の一部を現すものにして、排便後は直に肛内に引込む程度のも

のにして、嵌屯療法の目的に適はないのであります。

曾て痔核が、相當に膨脹して、通便毎に脱出したるもの、其出血に據て、脱出なからしむるものに否ざれども、出血以前の如き、脱出を得ざるものにして、此嵌屯療法の目的に副がないのがあります。殊に壯年時代の未熟なる痔核及出血性痔核にして、肛外に脱出せざるものに對しては、時期の到るを待つ外、根本療法は、不能とするのであります。唯一時刺戟に因て來る、炎症を除き、其出血あるものに對しては、止血手段を執るの外、他に療法は望んで、得べからざるものであります。要するに痔核は、外部に脱出する機會を逸せず、加療する事を、記憶せねばならぬのであります。

而して滲出的、點落出血は、慢るゝに足らざるも、飛散する出血は、可及的早く

止血を求めねば、肛内に押込みたる後も、往々にして出血、腸に流れ、自己の氣付かざる内に、多量の血液を失ひ、爲に腦或は心臟に異常を感するのであります。殊に内部の暗き便所は、出血あるを知りがたく、貧血は、猶他に原因するが如く、止血を圖らずして、補血を需むるが如き、愚を爲すもの、亦尠からぬのであります。

#### 温療法は重症なる痔核に適す

痔核は、前述の原因症候に據て、發生すと雖も、一は日常其人の生活の状態に伴はれ、飲食其他運動作業に關係して、重又輕症の差を生ずるものであります。二十歳前後に於ては、痔核未だ全からざるものありて、之を外部に見る事罕なるも、三十歳前後に至りて、痔核漸く其症體を調へ、不斷の排便は、繼續的刺戟となり、不適の飲食關て、其症を助ける爲、輕重自ら生ずるものであります。

而して痔核は歳と共に、膨脹其度を加へ、肛内の空虚は、何日しか是れに據て獨占せられ、排便其間隙を有せざる爲、強て肛外の脱出を、餘義なくさるゝものであまりす。其初期に於ける脱出は、特に劇烈なる苦痛を味ふ爲、常に排便を怠り、因て結成する糞塊は、一層次回の排泄を、困難ならしむるものにして、遂には便通毎に脱出して、其習慣を作り、漸次括約筋の弛緩となり、老羸亦自ら緊縮力を弛め、提重擔荷は元より歩行或は身體の屈伸にも亦、容易に脱出し、體力の衰耗は遂に括約無能の状態に陥り、痔核は其位置を轉じて、外部に屯し、身體の自由亦夫が爲に、束縛の止むを得ざるものと成るので、此長期の苦痛は、亦能く、筆紙の盡し難きものであります。

著者が、茲に述ぶる治療法に據る時、以上の経過中、如何なる場合を、最も適當なりとするか、重症亦何故治療に適するや、逐次之が説明を重ねんとするに當り先圖面を以て、其了解を易からしめんと、思惟するのであります。

第一圖は、痔核が肛内に、潜在する形状を、斷面に顯すものにして、痔核の周圍は、軟泥なる粘膜に接して、何等壓迫の加ふる、處あらざるに因り、苦痛を感ずる事あらざるも、催便一度到るあらば、先其障碍たる痔核を排除せざるべからず、是此症の最も難關とする所であります。圖面を參照思考するならば、其苦痛の感ずる原因、亦思ひ半に過ぎぬものあるべし。圖面は想像的に過ぎざるも、宛當を失するものにあらざるなり。

第二圖は即ち本療法、最も要點として、留意すべきもので、痔核を肛外に嵌屯せしめたる、局部の斷面を示すものであります。痔核は遺憾なく肛外に脱出し、括

約筋亦完全に、周圍を緊約し、血行茲に遮斷さるゝものにして、排便亦何等の障礙なく、殆ど普通に異なる處なきも、括約筋による痔核の緊縛は肛圍に炎症を誘發して鬱血腫脹を招來し、括約筋の緊縛、強劇なれば、夫丈焮腫の度増脹して、近接血管亦是れに因て、障礙せられ、血液漿液の滲出相和して、第三圖の如く鬱血腫脹を來すものであります。

されど痔核は、時間の経過と共に、第二圖に示す如く、緊約部位次第に細く、結紮状態を爲し、一晚の経過は、殆んど在來の位置形状を一變し、而して痔核は爰に全く嵌屯するのであります。

此際に於ける痔核の脱出は、其位置及形状に據て、括約筋の緊縛容易なるものと否らざるものあり。重症殊に膨大なる外形を有し、脱出よく其全形を現し、殆ど

内部に残留すべきものなく、緊約其宜に適するが故に、重症最も此療法の意義に副ふのであります。痔核未だ熟せず、隨て肛内の間隙、猶排便の餘有を存するものにありては痔核の脱出全からざるものにして、往々内部に潜在する、痔核を知らざるものあり。去れど時候の變移、刺戟の過剩、時として苦痛を訴ふの事あるも此際根治的療法を、需めんとして、能ふべからざるものであります。唯一時刺戟による、炎症を消散せしめ、因て其排便を易からしむるに、過ぎないのであります。而して最も適すべき療期は、括約筋の弛緩せざる時代にして、潜在痔核が、外部に全形を現し、完全に嵌屯すべき、可能性を有する時、換言すれば、痔核脱出して疼痛劇甚なる時を、可とするのであります。故に痔核の最も大きく、脱出したる時自己の手に押込得ざる時、亦押込むにあらざれば、自然の復納成らざる時を以て、

最も其宜に適ふものとするのであります。

痔核の疼痛は、主として括約筋の緊縛に、因るものにして、壯年期は強き、緊約力を有すれど、年と共に鈍り、脱出習慣。亦與て弛緩を助成し、老羸殆ど其力を失ふ爲、脱出時に於て、苦痛を感じる事なきも、此療法の目的に遠ざかるものであります。

去れど、痔核を、外部に發見する事、人毎に多少早晚の差異ありて、老年に到るも、猶疼痛を感じるものあり。即ち括約筋の未だ全く、弛緩衰頹せざるが故であります。亦括約力衰微すと雖も、痔核の位置形状に因て、治療の可能性を有するもの宛莫しとせざるなり。要するに、痔核の形状は、其部位を限制し、特に際立たるものを可とするのであります。されど老年者は壯者の如く、早き治療を、望む事

が出来得ないのであります。

#### 痔核嵌屯療法の安全なる理由

以上の説明に述ぶる如く、痔核は血行障碍より來る、靜脈擴張で、其慢性症に至つては、既に多數の毛細血管を形成し、靜脈本管との聯絡完備し、血液常に停滞填充するが故に、其手段の如何に論なく、痔核外面の皮膜を破壊する處置は、冒險と看做さねばならぬのであります。焼灼法、結紮法、腐蝕法等近時一般に行はるゝ療法には、表皮組織を破壊せずして、根治せしむる療法あるを不聞、何れも其手段に伴ふて、破壊的滅滅を圖るのであります。故に其處置後、萬一創面に變化を與ふべき何かの機會ある毎に危険を感じるのであります。

卷頭に例を掲げたる、某國務大臣の痔核も元より冒險的に行ひし處置にあらずと



するも、痔核其物が出血の危険性を有するが故に、些細の變化も忽危険を招來するのであります。初め四百瓦程の出血が三四回續いて後、最後に床を掃除する爲に身を起したのが、出血の原因となり、亦致命の基因を爲したと言ふ事が、當事の新聞に發表されましたが、此出血は所謂表皮を破壊する處置行爲に基くものにして、絶對安静を必要とせられたのであります。併し僅に身を起すも忽危険を招く處置を何故に受けねばならなかつたか夫は現今の一般療法が此危懼を、避くべき適當な療法手段が得られぬからであります。遠き將來は知らず、目下の治療方法に據つては、止むを得ないのであります。爰に到つて嵌屯療治が、最も安全と思惟するものにして其手段が自然的に適ひ、少しも危険を感じる事なく、時日の経過と共に、萎靡減滅せしむるものにして、一通り此法に通曉するならば素人にも能く其目的を達

し得らるゝが故に、此發表を企圖せし所以なのであります。

總て痔核の發生する部位が、肛内粘膜なるが故に、自然的吸收が不可能なるのみならず、其萎縮を圖るに適當の手段なく、亦剔除手術に適せざる爲に、處置療法を種々に試みらるゝ結果、古來一定の療法とするものあらず。故に其何れの處置を可とするかに惑ふもの多くして、一朝其撰擇を誤る時は、如上の危険に遭遇するものにして、現今痔核に對する一般療法は其何れを選ぶも一得一失は通れ難きものであります。其症狀の如何により、或は甲療法に適するも、乙療法に適せず、乙療法に適するもの、亦甲療法に適ふものなしとせざるも、適處に適所を得るは、餅は餅屋、酒は酒屋の意義に適ふものと、思惟されるのであります。

而して自己の症狀が、甲乙其何れに因るを、可とすべきやの問題は、今直に其

解決を望むべからずとするも、生理的原因、病理的治療手段の、幾分を辨へるあらば自己の疾病に對し、比較的安道の道に寄るの利益尠からぬものと、思惟するゝが故に、通俗的醫書を述作して、是れを殊更購ふ必要なくして。病理上の智識向上を圖りたいと爲るが此發表の趣意とするのであります。

説明爰に到る時、嵌屯療法の手段方法が、將して安全でありや否は、容易に了解し得るものと思惟すれど我田引水の誹りなからしめん爲、比較材料として、現今行はるゝ一般的療法の摘要を掲げて其参考に供へんとするも蓋し自己の研究外に屬するを以て、充分要領を穿ち得ざるものあり。唯概略を記して、比較的對照に資せんとするのであります。亦自己疾病の治療を圖るもの、其何れか一を需めねばならぬものにして、治療手段の一般概略を知るも無益にあらざるを思ふ爲、左に其梗概を

掲げて参考に供へるものであります。

### 瘰癧に對する一般的療法の概畧

#### 其一、燒灼法

燒灼法とは、文字の示す如く、烙鐵亦是烙白金に因て、局部組織を燒斷し、或は灼滅を圖るものにして、其主なる目的は、剪刀に因る分割剔出切斷を、不可とする軟部組織に應用して、出血無からしめんとするものであります。

古來烙鐵の應用は、主として手術後の止血手段として專用されしも、爾來之が應用は、燒斷灼滅に適するものとなし、現今更に精密なる、此種機械の續出して、鐵は白金に替へられ、之が使用に當り、酒精燈或はベンチン燈に因て、熾熱し、以て燒斷灼滅を圖るものにして、今又電氣を應用し、電流の接絶、因て瞬間に熾熱亦

冷却の自由なるものあり、獨逸人ミッデルドルフ氏の創成に係り、此種機械の覇を爲すものであります。此等焼灼器に因つて焼斷灼滅したる、創面は、毫も出血を見る懼れなしとして、痔核の焼斷に應用さるゝものであります。されど實地之が應用に當り、痔核其物の形狀位置の差に因て、適不適の生ずるは、當然なるものにして、縦令適當と認むるものに行ふとするも、百的百中を望む事は、不可能ならざるやを思惟さるゝものであります。

何となれば、隆起物は痔核の全體であります。隆起なくして、外部に停屯すべき性質のものにあらず、焼斷後は其帶部を支持する鉗子を除くと同時に、其創面は是非肛内に引込むものであります。元來痔核の位置が内部粘膜である爲、舊位置に復納するが當然であります。此復納時に於て、焼縮された血管面が將して事なきを

得べきか、殊に痔核が二三に區劃されて存在する時其全部を一時に除く事は無論危険の度を強くするものにして假に、其一個を焼斷し他二個が停屯する時即ち一方は外部に固定し、一方は内部に引かるゝ時、創面が如何なる形狀を爲すことあるも、猶安全たる事を得るものであるか、自己の研究外にある爲、確信し得ざれば、諸君の判斷に委ぬるものであります。

其二、腐蝕法

腐蝕法には固性軟性或は液性等の種類ありて、化學的藥物、即ち腐蝕性の劇薬を使用し、組織を破壊し、若しくは其分割を目的とするものであります。之を痔核又は痔瘻に對し、應用さるゝ事は、古來或一部に於て用ひられしも、元來腐蝕薬は、素人の直接扱ふべき薬品にあらず、而已ならず其使用に際し、之を豫告して

行ふ事は殆ど罕なるものにして、患者若其劇痛を怖るゝあらば、其處置の遂げがたきを思惟するが故に、單に泌みる薬と稱して、應用さるゝ場合多く、爲に腐蝕法として一般的に知られざりしも、近來痔核痔瘻等に應用さるゝ事益々多きを爲すが如し、畢竟手術を壓ふもの多き結果にして、亦手術の易からざるを意味するものであります。

痔瘻に對し行ふ腐蝕手段は次章に譲り、痔核は如何にして行はるゝか、即ち軟性液性の二法によるものにして一は軟泥状を爲し外部より貼用し、一は液體の注射であります。其外部よりするものは、痔核面に密着貼用し、幾度か反覆さるゝものにして之に因て漸次組織の減滅を圖るものであります。次に液體は之を痔核の中眞に向つて注射し、内部より腐蝕作用を起して、外部を破壊せんとするもので、前者は比較

的安全に近きも、貼用されたる腐蝕薬が、痔核より分泌する粘液に溶解され、周圍組織に流れて瀰爛を生じ是れが劇痛は亦堪へ難くして、痔核減滅に到る期間、之に堪へ得る者、殆ど罕なるものゝ如し、半途にして、若し終るならば、單に苦痛を求めたに過ぎないのであります。

次に腐蝕注射の劇痛は亦外用薬の比にあらず、而して注射液が痔核にのみ作用する事殆ど罕にして、其液體は靜脈本管に由つて、周圍組織に誘導され以外なる方面に炎症を招き、其炎症必ず化膿すべき性質を有する爲、痔核と併立して收拾すべからざる状態に陥る事あり。其利尠く害多くして、輒近に到り此種の注射は、殆ど廢絶したるが如し。

### 其三、結紮法

結紮に緩緊の二法あり、一は絹糸或は金屬線により、痔核の蒂部を緩縛して、徐々に絶縁を圖るものと、一は初めより緊縛して直に組織の血行を遮断せんとするものにして、其術宜しく適ふならば、安全なる療法にして、毫も出血するものにあらずれど、緊縛其度を得ざる時、往々にして、大出血を生ずるものであります。緩緊其何れによるも、一度縛定すれば、最後の到る迄、縛糸を除く事は出来得ないものであるから、是れを行はんとするには細心其適不適を判断せざるべからず。小なる痔核は比較的安安全なるも其大なるものに至らば、緩縛法に據る外、急劇なる緊縛は危険を醸す懼れあり、蓋し縛糸の纏絡方法及結紮の適不適を、識別する明なかるべからず。出血亦之に因て生ずるものであります。

嵌屯法は、此緩縛法を機械的によらず、自然的に同一目的を、遂げんとするものであります。此法殊に拙劣なるものにして、痔核の脱出を防ぐ爲に、肛圍に存在する伸縮性の皮膚組織を除き、因て肛孔の狭窄を圖り、而して痔核の脱出を防がんとするものにして、制脱は其目的に適ひたりとするも、豫後の排便は、軟硬共に意に任せず、常に糞汁の漏出絶ゆる時なく、之が始末亦容易ならざるものあり。殊に肛孔は一個の固定孔となり、硬便は肛孔を栓塞して通せず、軟便或は下痢時に時を定めず漏出するが故に常に襠褌の壓抵を必要とする等、運動是れに妨げられ終生癒すべからざる悔ひを需むるのであります。痔核は其脱出を防遏すと雖も、肛内に於ける發達は益々加はりて、苦痛時として訴ふる事ありとするも處置を執るに手段なからしむるも

であります。

其四、瘰癧結成を利用する制脱法

此法殊に拙劣なるものにして、痔核の脱出を防ぐ爲に、肛圍に存在する伸縮性の皮膚組織を除き、因て肛孔の狭窄を圖り、而して痔核の脱出を防がんとするものにして、制脱は其目的に適ひたりとするも、豫後の排便は、軟硬共に意に任せず、常に糞汁の漏出絶ゆる時なく、之が始末亦容易ならざるものあり。殊に肛孔は一個の固定孔となり、硬便は肛孔を栓塞して通せず、軟便或は下痢時に時を定めず漏出するが故に常に襠褌の壓抵を必要とする等、運動是れに妨げられ終生癒すべからざる悔ひを需むるのであります。痔核は其脱出を防遏すと雖も、肛内に於ける發達は益々加はりて、苦痛時として訴ふる事ありとするも處置を執るに手段なからしむるも

のであります。此法は縦令痔核を癒するに道なしとするも、殊更執るべき手段にあらずと思惟するものであります。

其五、注射法

前記腐蝕性の注射に據らずして、單に消炎作用を目的とする注射療法が現今其數を加へたるも、元より根治を目的とするものにあらず唯炎症を散じて、苦痛を緩和する手段に過ぎないのであります。以上の外温泉薬湯等の應用ありとするも、勿論根治的意味を爲すものにあらず、唯一時の消炎手段として行ふに過ぎざれば特筆すべき要を感じないのであります。

而して以上行はるゝ破壊的處置後に於て、萬一出血ありとせんか、血液は腸に流れ外部に於て發見する事罕なるものにして、腸の溜血は、即ち便通氣分となつて、

出血あるを知るのでありますが、總て肛門の施術は其準備として宿便を排除したる後、便の制止を圖るものであります。故に多少催便の氣分ありとするも、手術後は安靜を保つ目的に副はんとして、忍耐する爲、其間多量の血を失ひ、其出血を知る時既に遅く、或は出血の程度に因つて止血不可能なるあり、遂に致命の原因を爲すものであります。此危険は即ち痔核性來の素質を無視するから、招くものにして、自ら虎穴を探るに類するものであります。

殊に肛圍に於てする、破壊的施術は、創面の清潔を保つ必要を生ずる爲、入院後ならざるべからず、而して食事制限は因て排便なからしめんとするものにして、此際便通を許さば便の擦過に因て、創面を破壊せしめ、危機忽到るのみならず、創の汚染は以て其癒合を妨げるからであります。斯くて被術者は、繃帶交換洗除等の刺戟

と相俟て、僅の期間に異常の衰弱を來し、餘病亦是れに乗るのであります。四〇  
以上述ぶる一般の療法を参考として、任意其一を撰擇せんとするに當り、此冊子に因て何物か得る處あらば、幸と思惟するものであります。

#### 症候的處置に就て

便通時或は其他の機會に脱出する痔核は、別に教へられずとも、手に唾して是を押し込む事は、殆ど臨機の處置とされて居る様であります。所謂窮すれば通ずるの意にして、自然的其宜に適ふものであります。されど或機會に、痔核の瘀腫膨脹が其度に過ぐる時、往々にして、平常の手段に由つて、復納せざる場合あり。此際時間の経過は益々周囲の炎症を誘發し、鬱血漸次呼應して一層押込不可能なるものであります。此際唯押し込む外、手段なきものとして、一途に其復納に努むるは一般の應

急處置であります。

醫師を迎へて之を復納し終らば、夫に據て治療手段を了したるものとなし痔核が肛門器官の、一部であるかの様に、解釋さるゝ方が尠く莫ひ様であります。

唯單に冷へたからとか酒を過したから、或は刺戟物を食した爲に脱出するのである。復納すれば、普通の肛門であるとして、更に意に介しない方も、多い様であります。爲に折角醫を迎へて押し込めたものを、更に治療手段として是れを肛外に出すと言ふ事が、説明其理を盡すと雖も曾て脱出時に味ひたる苦痛と自己の不審に囚はれて、頑然反對さるゝ方なしとせないのであります。

されど痔核は、慢性的疾患にして、以上述ぶるが如き性質原因を有するが故に、之を内部に置いて自然消滅を圖る事は、絶對不可能の事であり、差込座薬とか外

用貼布劑の如きは、其能書の善悪、因て効を爲すべき、性質のものにあらず、唯一時を凌ぐ症候的處置に過ぎぬものにして、根治を意味するものにあらざる事を知らねばならぬのであります。

以上述ぶる説明に據り自己の症状と對照して、案するならば梗概的に、痔疾に對する病理の了解が出来得るものと考へますが、猶第二編に於て、本療法の目的とする、嵌屯療法の順序方法を述べ、因て以て前記説明の不審を補足し、能ふかぎり明瞭なる御了解を得たいと思惟するのであります。

## 第二章 痔瘻に對する概論

痔瘻は痔核に次ぐ難症で、殊に手術を必用とするのであります。手術なくて完全

なる治癒を望む事が、絶對不可能とする爲、素人療法として適當なる手段のあらざるを遺憾とするのであります。痔瘻が何故手術を必要とするか、世間或は手術を要せずして、治癒するが如き説を爲す者あるに、茲には何故に不可能と稱して憚らざるか、今其病理に就て逐次説明を加へ、此種患者の參考に供し、自ら治療法を撰擇する上に、大過なからしむるを得ば、著者の満足とする處であります。

古來腐蝕薬を以て痔瘻の治療手段とするものあり、されど其手段が如何なる程度の痔瘻に對して有効とするか、亦如何なる程度に達すれば、不適とするか若亦不適とする症に行はれた時、如何なる禍胎を生ずるや、蓋し素人の窺ひ知るべからざるものであります。故に自己の症状に對し、如何なる療法が適當であるかの撰擇は、素人に望み難き問題で、爲に非理の傳説に囚はれて、療期を失し或は處置の撰擇を



誤り、往々にして、收拾すべからざる重態に陥り、却て悩みを大きくするもの亦尠しとせぬのであります。

四四

而して腐蝕療法は、固性腐蝕劑を桿状となし、瘻竈の周圍組織を破壊せんが爲、之を瘻孔に挿入し、幾度か反覆して得たる、蝕滅を利用して、手術に替へんと圖るのであります。因て齎す結果は、同一なるものありとするも其苦痛の程度は必ずしも同一の比にあらざるを思惟されるのであります。死體にあらざる以上、肉體を腐蝕するに無刺戟なる藥劑の在り得べからざるものにして、其之を應用するに、腐蝕法と稱すれば、患者劇痛を推測して、其處置の執り難きを思ふ爲に、單に挿藥或は泌みる藥と稱して、使用さるゝのであります。

手術は全身半身、或は局處麻醉に據て、施術を無知覺の内に行ひ得るも、腐蝕法に於て麻醉の應用は、至難とするものであります。即ち總ての麻醉劑は、其麻痺期間が短く、之に反し腐蝕劑は腐蝕作用を、營む期間永くして、麻醉と相伴はざるが故に、其應用を至難とするのであります。隨て苦痛の永きは當然なるものにして殊に腐蝕手段が其目的を遂ぐる迄、幾度か反覆の必要を生ずる爲、其間の苦痛亦容易ならざるものあるを想像するのであります。

療法處置は其何れを選ぶも、要は只完全なる治癒が目的であります。腐蝕を可とすべき瘻竈に對して、其治療手段に應用さるゝ時、或は手術以上の効果を、收め得る場合なしとせざるも、夫を以て、一般痔瘻に適する療法と認むる事が出來ないのであります。

總て瘻竈は複雑なる内部を有し、其底邊に於て、更に二三の屈折を爲すものが、

多いのであります。消息子を以て、孔内を験するも、真直に底部に達して、後更に何れに屈折するやを、知り得ざるものがあります。此場合は、先消息子の達する、方向に添ふて、一應切解を了し、更に消息子を介して、屈折方向を需むる外、他に手段がないのであります。殊に屈折の角度が、一定すべからざるが爲に、固性桿状と爲る薬品の挿入が、一般に適せない事が、明瞭に推測出来得るのであります。若し屈折したる一部分を、残留して、癒合する場合ありとせんか、早晚再発の免れざるは勿論にして、次発は殊に難症と成り、不治症の原因亦此再発に多しとするのであります。即ち屈折深部に残留する病菌は、漸次増殖して、醗膿頻りに腫脹を促し、因つて病竈を擴張し、遂に軟部組織の侵害を容易ならしむるものであります。畢竟以前の癒合部分が、結締組織の爲、硬化さるゝに據り、外部の開口容易ならず

して軟弱なる内部組織を破壊して、増々膿の排泄を、困難ならしむるからであります。而已ならず、細菌は血管に侵入して、他の部位に移動し、或は肺臓を侵害する等、爰に其原因を、生ずるのであります。

既に病状爰に到つて、前處置の可否を云爲するも、何等甲斐なきものにして、如何とも處するに、道なく、自ら氣付頃、既に癒すべからざるものに到るのであります。

故に難症なる痔瘻は、下層末だ癒へざるに、上層癒着して、再發する場合に多く不良なる結果を生ずるものであります。總て肛圍の創は、括約筋の緊縮によつて創壁が常に密着する爲に、上層のみ癒着を易からしむるものにして、其癒合が餘りに早き時は、却て以上の弊害を、齎すものであります。

假に甲所に於て、僅一二週間に治癒し、乙所に於て、一二ヶ月を経過するも、猶癒へざる場合ありとせんか、是れを以て直に其可否を云爲すべきものにあらず、殊に肛圍は常に不潔なる糞汁に、汚染され易き爲に、肛内の創(全痔瘻)と、肛外の創(不全痔瘻)とは、其全癒に到る時日が、二三倍若しくは五六倍の、差を生ずるものであります。

總て創傷に對する今日の外科は、防腐的處置より、無腐的處置を可とし、絶對的無毒の創たらしめて、其癒合を圖らんとするのであります。去れど肛圍には、常に外部よりする、不潔物の侵害は、容易に遁れがたき位置にありて、自然防腐的處置に陥るものであります。夫が爲め治療の經過中、僅に注意を怠るならば何日か病毒を潜匿する儘、上層を癒着せしめて、再三の切解を必要とするのであります。如斯

虞れある爲に、痔瘻の餘りに、癒合早きは、決して佳良なる症徴とは認められな  
いのであります。

蓋し無腐的處置が、完全に行はれ、亦行ひ得る適所に其瘻竈を有するものは、是れが癒合に餘り永き時日を必要とはせないものであります。若之に反し、肛内深く病竈を有し、或は侵害する處ありて、無腐的處置の適はざる位置に達するものありとせば、如何に其處置が、嚴重に行はるゝとも、創面の清潔は容易に保つ能はざるものにして、自然的防腐處置に變化せしむるものであります。故に此際時日の遷延するは、宛處置の善惡に、獨り責を負はしむべからず。自己の症状及病竈の位置も亦關て其症因を助くるのであります。故に痔瘻は其根底から治癒するの見込なくして、一時的の處置、或は病毒を竈底に残留せしめ、上層のみ癒着する、虞れあ

五〇  
る處置は、却て禍を増大するものなれば深く留意して輕卒に處置を需めざるを可とするのであります。是れに據て痔瘻は、手術に由る治療にあらざば、確たる保證の望みがたきものにして、不可能と稱する所以、爰に存するのであります。

#### 痔瘻の起る原因及症候

痔瘻の發生は、其原因種々ありとするも、痔核と殆ど基因症徴を同くするもの多く、座職乗馬、或は自轉車等に因て、肛圍に存在する、血管に障害を與へ、因て血液の循環を妨ぐるからであります。

血液は常に全身を循環して 停止する所なしとするも局部的組織の活動に據て、多量血液を消費する部分と否らざるとの差異あり、亦或部分に於て血行の迅速なるあり、亦滯滞するあり、或は亦血行の全く停止する部分あり、即之を稱して、血行

の變調とするのであります。

如斯血液分佈に、不平均を生ぜしむる原因が、血管以外の作用に據るものと、血管内部の病的作用に據るものとがあります。されど其重なる原因は、外部よりする局部的障礙に據て、變調を來す事が多いのであります。

其外部より爲す、局部的障礙に據て、動脈血行久しく杜絶せんか、其局部組織は營養缺乏に陥て、遂に壞死敗類の遁るべからざるものであります。即ち動脈血は總ての組織を養ふ營養物であり、亦其血管は、是れが輸送器官である爲めに是れが杜絶は其部位の細胞を死滅せしめて、自然的組織の崩壊は止むを得ざる原因と成るのであります。

亦靜脈管に與へられたる障害に據て、還流杜絶する場合ありとせば、即ち前記動

脈血が、營養配給を了へて將に還らんとする。歸途を遮断するものにして、一は進路を妨げ、一は歸途を遮るの差ありとするも、其因で生ずる結果に到つては、同一の現象を呈するものであります。

されど動脈血は營養を齎す、清鮮なる血液なるも静脈血は營養物の配給を了ると共に、細胞より生ずる老廢物を伴ふ、不純なる血液なるが故に、其閉塞されたる部位に、集積鬱滯する血液の變化も自から異なるものであります。

動脈の閉塞に因て、集積さるゝ血液は其管壁を膨脹せしめ、管外に溢れて、組織に滲透し爰に局部的潮紅を呈するものにして、是れを動脈充血と稱へ、静脈の閉塞に因て生ずる、血液及漿液の滲出は、局部組織に鬱滯して、浮腫れを爲すあり。是れを静脈鬱血と稱へるのであります。其充血鬱血は、亦相共に隣接管の血行

を妨げる等、因て停滯する血液、茲に凝結し 血栓を爲し、漿液淋巴液等の滲出相和して局部的潮紅腫脹疼痛等を招來し 是れが化膿崩壊したるもの所謂痔瘻と稱へ、亦粘膜組織を擴張して、集團したる多數の毛細血管は瘤の如く隆起して、痔核の稱を爲すのであります。

血液の停滯は如此して怖るべき疾病を、招來するのであります。其症徴を知りて、直に原因を避け得るものであるなれば、未發の内に疾病なからしむる事を得るのであります。蓋し一般的状態は是れを避くるに手段あらざるを以て、症徴として多少感ずる處ありとするも苦痛の耐へ得る限り、無頓着に放擲し爲に、組織細胞の變化を生じ、疼痛耐へがたき症状を訴へる時、漸く其處置を需むるのが普通の状態であります。

畢竟疾病をして、爰に到らしむるもの、其準據すべき何物をも有せざるが故にして従つて是れが經驗を有せざると、病理を解せざるとに據て、餘義なく疾病たらしむるもの亦尠からぬのであります。

五四

彼の便通時に於て將に糞塊の出でんとするや、既に排泄中にある尿を、一時停止せしむる事は誰れも常に經驗して知る處であります。即ち糞塊の爲に尿道を壓迫するからで、若し此壓迫が、久しく持續する性質のものであるならば、如何なる結果を生せんとするか、血管閉塞も亦同一の理で其閉塞が尿道閉塞に於ける如く直に知覺し得ざるが爲、疾病亦容易ならしむるものであります。

而して爰に遺傳素質に因る、血管壁の軟弱なるものありて、僅の壓迫にも易々として、閉塞さるゝのみならず、管壁の破壊及血液の滲出亦容易なるものにして、既

に血液管外に溢れたる後に於て、血管障礙の除かるゝものありとするも、直に之を吸収し、消散すべき道なき場合あらば、遂に炎症を誘發し血液の變化を生じて化膿し、崩壊さるゝに到るものであります。故に以上の如き症徴を豫知する時は、早く適當する處置を執り、其吸収消散を補助するならば、組織細胞の死滅を防ぎ、化膿なからしむることを、得るものであります。

以上血管障礙の外、淋巴管の故障に因つて同一症狀を誘發する場合なしとせざるも、要するに淋巴液も血液分佈と均しく、一定の使命を帯びて淋巴管を循環するものである爲、是れが障礙を受くる時、亦同一の現象を來す、蓋し當然の事でありませぬ。

血管及淋巴管が自他の障礙に基因して、生ずる症徴は實に幽微玄妙なる作用あり

五五

りて、其詳細を悉さんとすれば、小冊子の能ふべからざるのみならず、此冊子を發表するの目的に副はざれば、以上の概述に止めて更に結核性病竈に就て其梗概を説明せんとするのであります。

抑結核病は、獨醫ローベルト・コッホ氏に據つて初めて其症因が一種の分裂菌たる事を發見せられてより、是れが傳染及遺傳に據る、徑路を判明するに到つたのであります。爾來其療法に就て、諸大家の研鑽怠らざるものあれど、猶且つ期待に副ふ良法を、得ざるものであります。故に茲には單に局所的肛圍に發生する結核及其潰瘍に就て普通痔瘻との對照資料として、其一端を概述するに過ぎないのであります。

結核は一種の慢性傳染にして、其肛圍に病竈を爲す原因は、血管淋巴管の誘導に

據つて、他の病竈より移動するのであります。亦血管淋巴管の障礙が、肛圍に於て常に損傷異常の生じ易き故にして、結核菌は其異常部より組織に侵入し、據つて爰に繁殖する結核菌の刺戟は、組織の新生を促して、限定的結節を生ずるものにして、所謂結核を形成するのであります。而して該結節の軟化崩潰したるもの、即ち結核性痔瘻と稱へるのであります。其經過は頗る緩慢なるものにして毫も炎症々状を呈する事あらざるも、往々にして混合傳染を爲すものあり。其炎症腫脹の症候が前者に反して甚だ急劇に化膿激痛を訴ふるものであります。

其他食事中に過つて呑込みたる魚骨が便通時の排除に際し糞塊に壓されて、肛門内部粘膜に挿入し、據つて炎症化膿の症因と成るあり。或は痔核面に擦過傷を與へて、痔出血の症因を爲すのであります。蓋し肛圍に發生する膿瘍は其原因の如何に據ら

す、總てを痔瘻と稱へて居るのであります。

### 痔瘻の手術に就て

古來痔は切るべからずと言ふ、傳説に囚はれて爲に不安を感ずる者、或は手術不良なる結果を傳聞して其必要の迫るを知らず或は躊躇せし爲に時期を失し不幸に陥る者の爲に、一言以て其不安を解き、後顧の憂なからしむるも、無益ならずと思惟するのであります。

往昔醫術の未だ進歩せざる、所謂漢法時代に於ける、外科處置を、今日回顧するなれば、或は兒戯に類するものなしとせないのであります。夫が爲切るべからざるものを切り、或は切るべきものを躊躇せし例尠しとせいであります。是れ時勢の然らしむる所にして今日の進歩發達せる外科手術も、幾年かの後に於て、猶其幼稚

を悟るの時、必ず實現せんとするものであります。故に手術すべからざる者、亦手術の結果往々にして不良なる症狀を、醸したるものに對して何日迄か、同一の非を繰り返へさんや、醫術は化學の進歩と共に日に月に既往の非を改め、進んで其微を究めんとして止まないであります。今や疾病の治療を、圖る時代過ぎて是れを未發の内に、疾病なからしめんとして居るのであります。

今日の所謂切るべからずとするもの及び手術の結果、往々にして不良なるものあるは、前章に述ぶる痔核を意味し、手術なくして完全に癒すべからずとするもの、即ち痔瘻を意味するのであります。故に何等病理的理解なくして、單に痔と言ふ總稱語に由つて痔は切るべからずと誤り傳へられて居るのであります。

而して痔核手術に、危険の伴ふ事は、前章已に説明を盡したるも今爰に手術を必

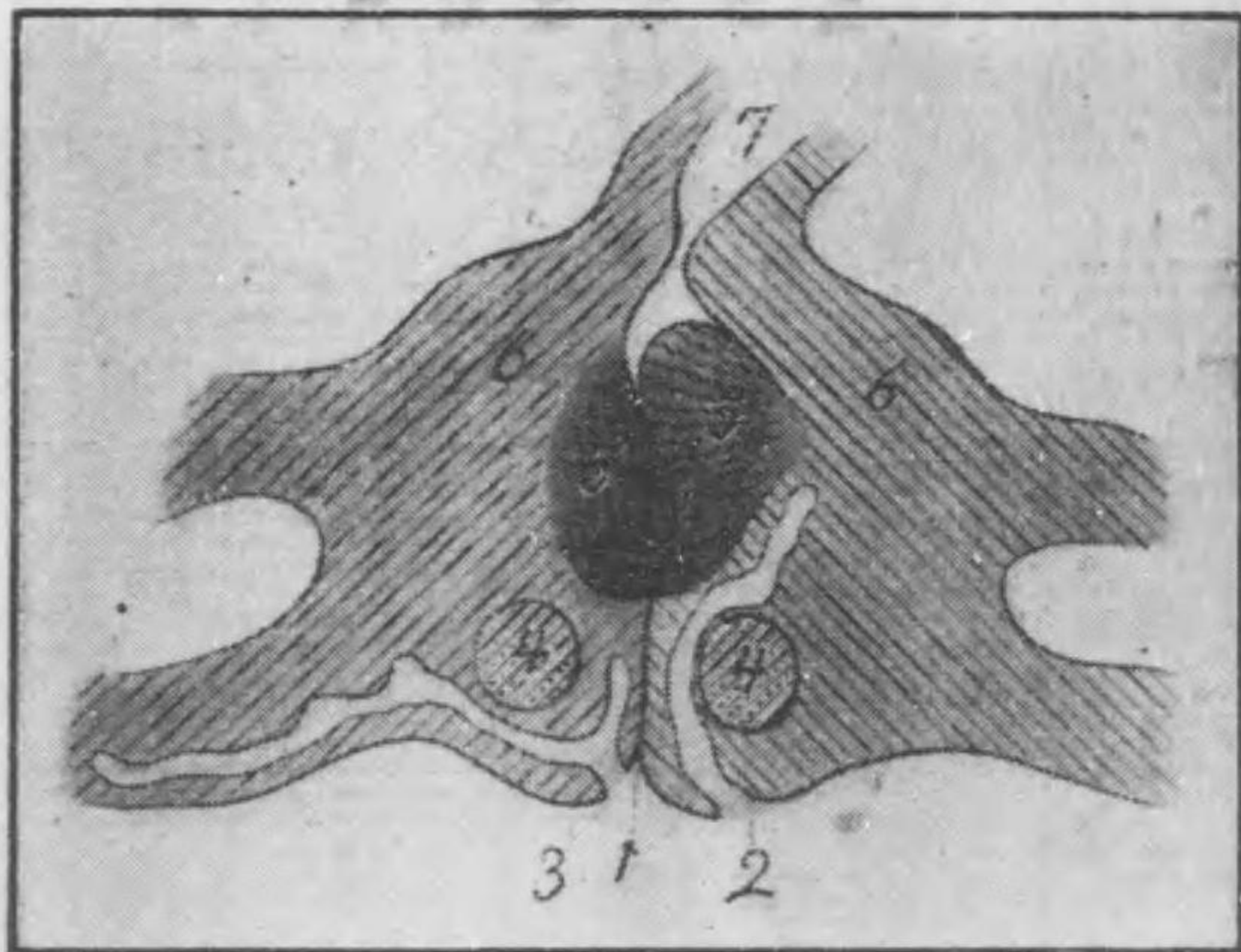


要とする痔瘻に就て些か所信を述べて以て参考に供せんとするものであります。

手術後結果不良とする痔瘻に就て

肛内既に痔核を形成すと雖も、夫が爲便通を妨げ、或は肛外に脱出し、疼痛を訴へるにあらざれば、自己に痔核ありと知らざるものが多いのであります。此際痔瘻の併發に因つて痔核内部の溜血が自然に瘻竈の吸收する處となり、痔核は漸次萎縮して肛内に潜匿するが故に患者の氣付かざり、勿論にして若し施術者の注意に缺くる處あり。其行ふ手術が、痔核の患部に到達する場合ありとせば、出血容易に止まず。其血は腸に流れて外部に發見すべからざる爲に、僅數分の間に危険忽迫るのであります。而して腸の溜血により、便通氣分を催し、出血あるを知る、も其程度に因つて止血容易ならず、血壓鈍へて漸く止血するも既に多量の血液を失ふて居

第七圖痔核併發瘻之斷面圖

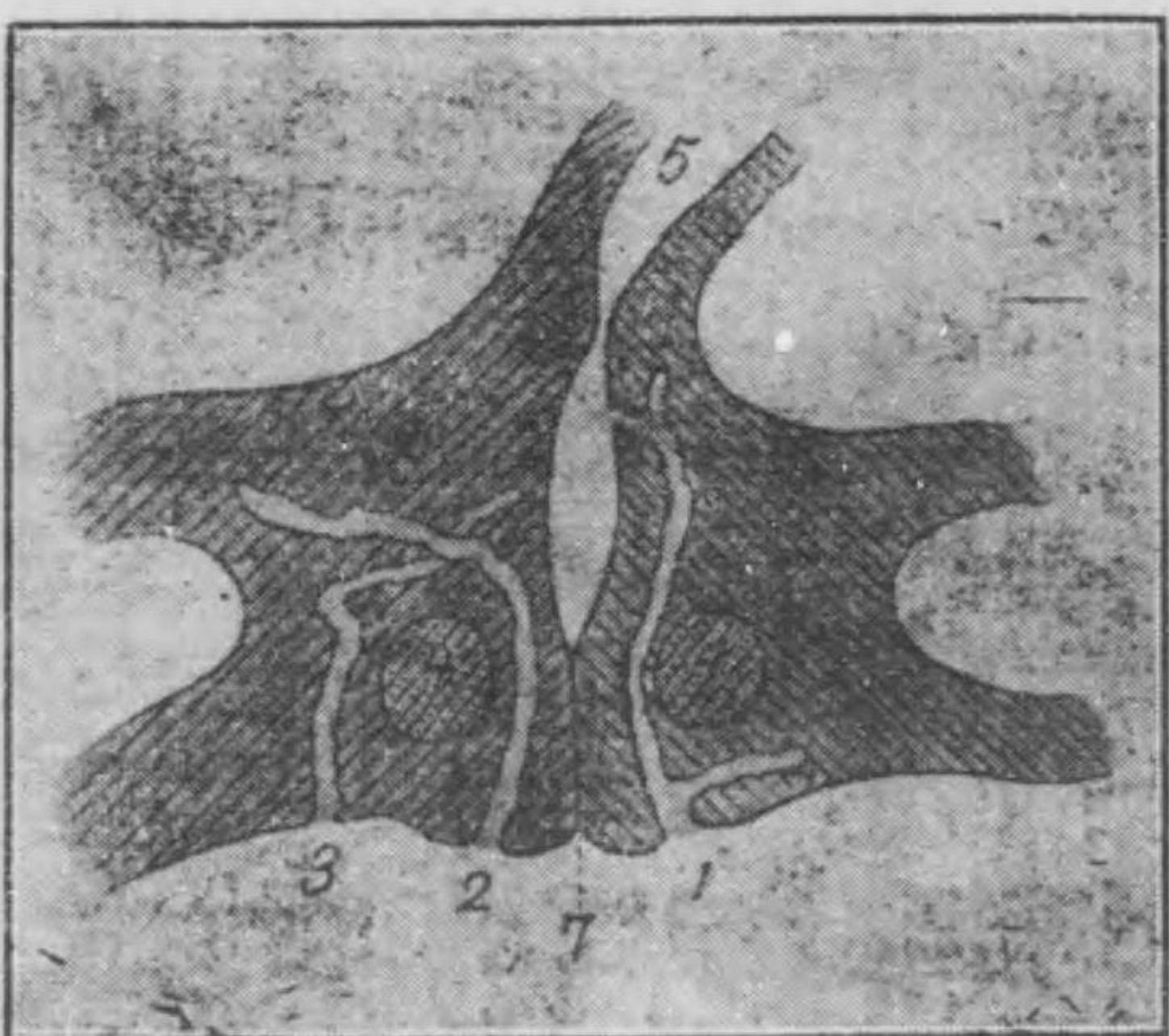


- 1 肛門
- 2 危險疔
- 3 輕症
- 4 括約筋
- 5 痔核
- 6 組織
- 7 直腸

る關係から、縱令其際死を免れ得るとも、爲に天壽を全ふすべからざる、原因を爲すのであります。即ち第七圖は肛内に痔核を潜匿し痔瘻是に添ひて深層を侵し其手術は、忽如上の危険を招來するものであります。次は輕症なる外痔瘻にして如何程廣く蔓延すとも少しも危險性を有する事なく治療亦容易なるものにして何れも其斷面を示すもであります。普通外科の法として、手術前下劑を與へて、宿便を排除し、後には、制瀉劑を服用せしめて、便通を止め手術後の創

面汚染するを防止、而して第一期創面の癒合を營む迄、可及的清潔を保つ必要を生

第八圖 瘻管斷面圖



- 1 重症
- 2 不治症
- 3 不治症
- 4 括約筋
- 5 直腸
- 6 組織
- 7 肛門

じて、食事制限を行ふものであります。爲に創の苦痛と、營養不足に因る衰弱の爲、遂に不幸の終焉を遂げしむるもの、或は尠なしとせないであります。加之若し出血の伴ふ事あらば、其結果たる蓋し論するに足らぬのであります。次に注意を要するは、瘻孔の深さ方向であります。其症狀に據て手術を可とするか否は蓋し術者の自信ある判断を必要とするのであります。手

術後に起る結果を、顧慮する所なくして、事を處するは輕卒と言ふよりは寧技術に疎く、經驗に乏しきものと、看做さねばならぬのであります。第八圖は手術可能性を有する全痔瘻と手術を不可とする不治症を斷面圖に仍つて示したるものであります。手術の結果括約筋を無能ならしめ、爲に大便自然に漏出せしむるもの、或は肛門の伸縮組織を除去するに因つて、肛門を一個の固定孔たらしめ、軟便は自癒して時を選ばず、硬便は栓塞して排泄容易ならざるもの等、間々見聞する處にして、是等の稱へる不平不満は難て傳説を爲して痔は切るべからずとなし、延て手術を厭ふは亦當然であります。然らば若し深き瘻竈を有し、方向悪しきものありて、前述の如き結果ありと斷定する場合、如何に處するを可とするや。痔瘻は其根治すべきものに對しては手術を必要とすれど、其之を行ふにあらざれば、直に生命を奪ふもの

にあらず、手術を厭ふ結果、二三十年を無事に経過し、或は天命を全ふしたるの例亦尠からぬのであります。されど痔瘻は其病竈の位置及び細菌の種類に據つて差異なしとせざるも不良なる結果を豫知し、或は危険の忽到る症状を深く顧慮せずして、手術の必要を認めないのであります。殊に其結果の如何は、被術者の與り知るべからざるものにして、施術者の獨專する判断に任ずるのであります。苟も術を處する者、細心の注意は勿論にして、施術後の結果が其以前に優るべき確認なくして、徒に苦痛を與へ、手術後に於て、其癒すべからざるを知り或は不具と爲して、猶癒へざるものあるは一に術者の輕卒なる判断に胚胎するものにして、被術者の不幸、亦何に據つて償ふものあらんや。

痔瘻は其膿腫時に於て、疼痛を訴ふるも既に破壊されたる瘻竈は殆ど苦痛を感じ

ないのであります。素人が神佛の祈願、或は呪咀等の、効驗を云爲するも、此時であります。外壁自然に崩壊して、其苦痛頓に忘れたるが如き感を爲すも、自然的に到る現象にして、所謂呪咀の切徳なりとの、傳説を胚胎するも、畢竟其苦痛を拭ふか如き感を爲すからであります。而して瘻孔は僅に分泌物を出すに過ぎざれば、何等苦痛とするに足らず。既にして病竈の創壁は、結締組織に由つて瘻管を結成し爰に細菌の侵害を防ぐべく、自然に具有する防禦機能に據つて二三十年に亘る長年月を、無事に経過し得らるのであります。

されど身體の衰耗は、能く防禦機能を怠るが故に、遂に病毒の乗する處と成り、或は瘻口に贅肉を生じ、其増殖は遂に孔口を塞ぎ、分泌物の停止は再び病竈に蓄膿して、膿腫更に疼痛を訴へるのであります。此際一時も早く穿孔して、其蓄膿を排除

するに非ざれば細菌の増殖は何れにか其棲息地を、開拓せんとする、蓋し勢ひ已むを得ないのであります。如斯場合に於て尙手術を厭ふ意味のもとに、自然の開口を待つが如き愚を爲さんか、細菌は深部の比較的軟弱なる組織を、侵害するのみならず、血管に誘導されて、他部に移動し、或は肺臓に侵襲して、爰に漸く終焉を遂げしむるものであります。以上の如き不良の結果を、招來するもの、獨り手術を怠るの罪に負ふべからず。畢竟病理に疎くして、症に適ひ機に應ずるの辨へなきに、胚胎するものにして、宛根本手術を需めずとも、膿腫時僅に穿孔して、排膿の期を失せず、或は瘻孔の閉塞を防ぐに、適當なる處置を執らば、因て細菌の繁殖を防遏し従て自然的の防禦機能を助ける爲、急劇に進行し能はざるものであります。以上は手術を不可とする病竈に對する注意に過ぎずして手術に據つて全癒すべきも

の、執るべき手段ならず。人體何日か異常の變化を生ずるや量り知るべからず、若し其抵抗力を減殺する内外疾病の胃す處となり。其衰耗に乗じて、恣に細菌の侵襲さるゝあらば、悔て詮なき不幸を招來するのであります。殊に手術を厭ふもの婦人に多く、亦或意味に於て疾病を秘する爲に、不知不識病毒の侵害を、容易ならしむるものにして、比較的重症を出すのであります。

茲に最も注意を要するは、疼痛時であります。痔瘻の疼痛は、瘻孔を閉塞さるゝが爲に、發する症徴であります。膿腫は所謂細菌の繁殖によりて、其根據とする瘻竈を開拓し擴張せんとする爲に、炎症を誘發して居るのであります。此時外壁淺薄なれば、僅の時日にして自然開口を爲すも若し病竈深く發生するか、或は慢性痔瘻にして、外壁は既に硬固なる結締組織に蔽はれ、外部崩壞の容易ならざる時に於て

自然の開口を待つ事あらば、爲に局部の炎症腫脹は、増々其度を加へ、隣接血管亦是れが爲に障碍を起し、細菌の増殖は次第に勢力を加へ組織及び血管を軟化して、態に移轉し、各所に病竈を分遣し、其結果は又症因を反覆して收拾すべからざる状態に陥るのであります。痔瘻必ず肺を侵すに決すべからず。此膿腫時。即ち疼痛時の注意を缺ぐ故にして、細菌の移動を、餘義なくせしむるものであります。據て手術を厭ひ或は手術不可能とする、痔瘻は常に瘻孔の閉塞所謂疼痛時に注意して、時を逸する事なく直に其穿孔に務め、蓄膿の排除に適する處置を、需めなければならぬのであります。

### 第三章 濕痔に對する概論

濕痔とは、梅毒の感染に因つて發生する、肛門病の一種にして、梅毒第二期の症状であります。微毒を第一第二三期に區別し、其の第一期と稱するは、感染の初期一局部に、限割して發生する、硬性下疳の症を言ふのであります。其の第二期は下疳の處置を謬り、或は治療の時期を失する爲に、將に全身症状に入りたるものにして、第三期症状に到る迄の、諸症徴を指して名付くるも、病毒其物に何等變化を有するものにあらず。唯症候の變化に伴ふて、之が治療上其處置を異にするが爲に區別の必要を生するのであります。

近時細菌學の發達は、日に月に相進み、諸種の病毒感染の原因が、細菌の傳搬に

因る事を發見せらるゝに當り、微毒も亦特異の、細菌に因にて侵害さるゝ、慢性傳染なる事が、闡明にされたのであります。

されど素人には、猶不可解なるもの多く、往々其療法を誤り、時期を失するものが多い、而已ならず、爲に此怖るべき病毒の傳搬を防遏する注意を缺きて累を他に及ぼすもの、亦尠なしとせないのであります。

殊に常識に缺ぐる、低腦者に到つては、病毒の傳搬を恐れず、却つて他人に之を移せば、自己の疾病を癒するが如き傳説を爲し、殊更婦人に接觸せんとする、不徳輕輩者のあるは、屢次耳にする處にして、其愚や實に慨歎に堪へないではありませんか。蓋し其一面を觀察するならば、所謂病理的理解を缺ぐ結果にして、理解而して後に、其懼るべきを知るのであります。故に其病理の一端を爰に説明し、未だ其理

解なき者の爲に一言するも無益ならずと、思惟するのであります

微毒と痔の區別に就て

痔は微毒の一種と看做し、或は梅毒を意味するものと心得る者が、尠からぬのであります。其誤傳は何に胚胎するか、俗に下の病と稱する者、將して何を意味するか、即ち痔、婦人病、花柳病を總稱して、其區別を辨へない結果であります。亦婦人病に就て、其區別判然するものありとするも痔と花柳病、或は婦人病と花柳病とを混合して、考へる者が尠くないのであります。勿論婦人病中、花柳病に關聯するものなしとせざるも、單に婦人病と稱する以上は、男子にあるべからざる特種の疾病でなければならぬのであります。而して俗に下の病と稱へる内に、痔と梅毒を同一の意義に解する者が多く、亦痔と梅毒との識別は判然たるも、花柳病を梅毒の異

名と誤解して、痲病に驅徴法を行ひ、痔核痔瘻に、サルヴアルサン注射を受くるなど、屢々見聞する處であります。

花柳病とは、男女の交接が主なる媒介となり、特異の細菌が傳染するものにして、即ち軟性下疳、硬性下疳及痲病に對する總稱語で、其の内硬性下疳が所謂梅毒の初期であります。識者に對し如斯説明は、其必要を感せざるも、是れが性質及區別を辨へずして、處置を認る者の爲に、其誤解を解く必要を、感するのであります。

花柳病は其古亡國病とさへ稱へらるゝ程、世を毒せしものであるが、其豫防は到つて容易であります。唯是れを怖れると言ふ、一言に盡し得るのであります。即ち其病毒は接觸感染で、病毒に接する機會を需めざれば、感染すべからざるものにて、畢竟覺悟の上、自ら進んで需むる疾病であります。併し敢て感染を望む程の

者なしとするも、病毒の怖るべき結果を、知る程度に差異ありて、自ら豫防し得る者と、自ら進んで需むる者との差を生ずるのであります。其自ら進んで需むる者には、梅毒も一應經驗するにあらざれば、男子たる資格に、缺ぐると言ふ不合理なる輕輩者の言に、誘惑さるゝものあり、或は一時の性慾を掩へ難く、進んで虎穴を探らんとする、蠻勇者に多く、而して虎兒を得て歸するは當然たるものあれど、空聞を温めて待つ、彼の配偶者は、豫期せざる虎兒の爲に咬まれ、其治療を恥するが爲に、久しき病苦に悩み、遂には自然に具ふる美貌を失するに到る、亦何を以て償はんや。一度感染を餘義なくするも、其病毒の怖るべきを不知、病理を解せざるが爲に、僅局部的治療に據つて、全治したりと爲し、病毒の潜伏するを知らず、遂に子孫に傳へて、不幸なる結果の實現するのであります。即ち先天的梅毒と稱して、諸種の

病狀に現れ、永遠に亘り子孫を苦しむる者あるは世間周知の事實にして、一況に胎毒と稱するもの所謂先天的梅毒にして、是れを遺傳するに三途あり。其一は精液或は卵細胞内に病毒を有し、是れを胎兒に傳播するを眞の遺傳となし、次は胎兒が胎内生活中、母體の血行より病毒を傳ふるものにして、是れを胎内傳染とするのであります。されど母體強健なる者は、從つて胎盤健全なるが故に、病毒爰に抑制し胎盤の通過を許さざるも、一朝病變に會して母體の衰耗に乗せらるゝ時、病毒の通過を餘義なくせしむるのであります。而して健全なる胎盤に抑制されて、其胎兒は全くの無毒たるものもあるも、胎外に出でて母の授乳よりする傳染であります。胎外に於て傳染するもの、勿論後天的傳染に相違あらざるも、母乳の養育に據て生るもの、唯僅に其徑路を異にするのみにして、其結果たるや、殆ど同一なるものあるが

故に、特に是れを先天的の梅毒傳染として、素人の了解を易からしむるものであります。



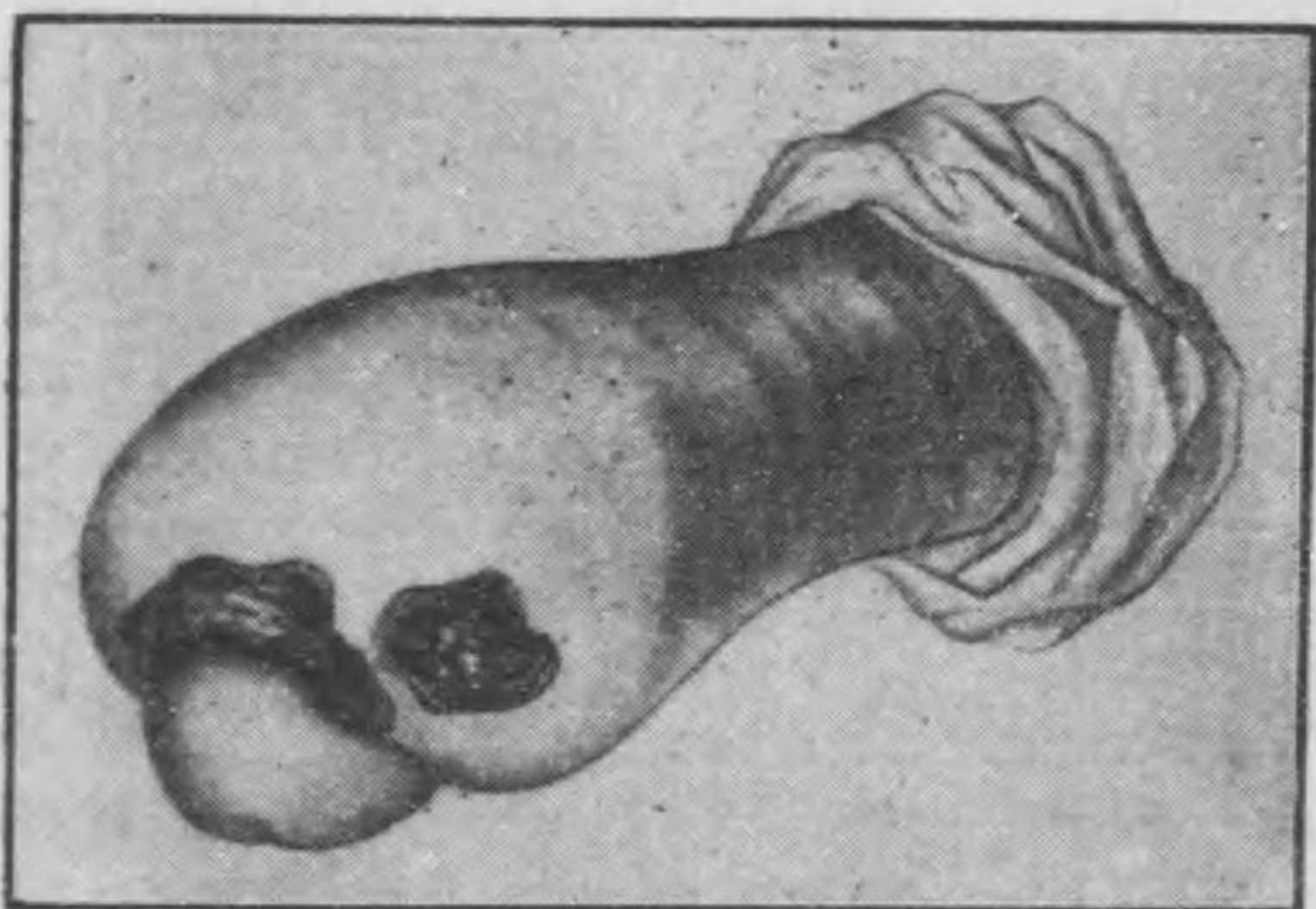
第九圖 濕 痔  
1 濕性贅肉 2 扁平濕疣 3 軟硬混合潰瘍  
梅毒第一第二第三期症候に就て

而して兒童の此種疾病を、胎毒として恥ぢざる者、世間其數多きも、是れが根源を需むるならば、必ずや恥すべき行爲の結果にして、自己の品性は之に據つて、表明するものであります。常識を供ふる者、深く意を爰に留め、而して慎まねばならぬのであります。



梅毒の第一期症徴は第十壹圖に示す如く初め感染したる一局部に限畫されて、病  
毒未だ他に移動せざる間を言ふのであります。第二期症徴は、其限畫區域を擴張し

第一圖軟性下疳



病毒遂に血管を侵害し、而して血行の誘導に據り  
將に全身症状に入らんとする時、即ち第二期の初  
めであります。併して先づ鼠蹊腺より次第に全身  
の淋巴腺に變化を與へ、到る處に硬固なる、豌豆  
大の腫脹を生じ、其鼠蹊腺に生ずるものを、横疔  
と稱へるのであります。

梅毒性横疔は、無痛にして化膿するものにあら  
ざるも、軟性下疳より來る横疔は、腫脹疼痛を訴

へ、遂に化膿崩壊するものであります。されど局處的疾病にして、梅毒の如く全身  
を侵すべき性質を有せず、而して軟性下疳は、組織の崩壊を以て症徴とするが故に、  
潰瘍を以て、終始するのであります。之に反し硬性下疳の症徴は、組織の新生であ  
ります故に、初めより潰瘍なくて終る事あり。其潰瘍を生ずるは、細胞の新生盛に  
して、爲に組織を養ふ毛細管を壓迫するが故にして遂に上層を壊死せしめ、而して  
除々に其下層に及ぼさんとするものにして、分泌物亦極めて少量であります。軟  
性下疳は組織の崩壊する事到つて早く、自家傳染、亦其膿潰を大ならしむるもので  
あります。而して硬性下疳は單發するを常として、自家傳染を認めざるも、遂に血  
管を侵して全身に蔓延し、第二第三期の症徴を爲すのであります。軟性症は、其經  
過中疼痛の堪へがたきものあるも、局處の治癒に據つて、全く病毒を除き得るので

あります。

斯くて梅毒は、其感染後四五十日、或は七八十日の後第二期症徴として、淋巴腺の腫脹に初まり、皮膚及粘膜に發疹を生じ、體質虛弱なる者に在りては、發疹前に夜間の頭痛を感じ、眼に虹彩炎を生じ、諸關節に炎症を誘發し、骨痛、神經痛及び四肢等に屢々痛みを感じて多少熱發する者あり、其他口腔及鼻腔内に、潰瘍を生じ、音聲の變化頭髮の脱落するあり、亦發疹期に際し、往々消化器に障礙を與へ、罕には黃疸、血尿、脾腫等を招來して、全身次第に瘦削するものであります。殊に皮膚面に發生する微毒疹は、其種類多しとするも、就中臨床上、最も肝要なるものにして、本編の主要とするものは、濕痔であります。其異名として扁平濕疣或は扁平胼胝腫又濕性丘疹と稱へ、即ち第九圖に示すものにして主として婦人の陰部又は男

第一圖 硬性下疳



女の肛圍に發生するものであります。該疹は常に皮膚の摩擦面、及分泌物の刺戟に據つて容易に潮紅を呈する、軟弱の皮膚に發生するものにして、皮膚面より著しく隆起を爲し、灰白色或は帶褐赤色を呈し、常に表面濕潤するが爲に、濕痔の

稱を爲すものにして、稀薄の液或は惡臭を發する膿汁を滲出するものであります。而して其分泌物には、強き傳染力を有する細菌の多く混するが故、男女の關係は其接觸部位に、感染するのであります。殊に陰部の皮膚は軟弱にして、交接の際其摩擦に損傷を生じ易く、亦其接觸を久しくするからであります。次で接吻は唾液に含む病菌の爲に、口唇及口腔粘膜に、

原發症を需むるものにして、既に述ぶる授乳も、亦直接傳染の一であります。亦微毒性小兒に據り、健全なる母の乳頭に移す事、尠しとせず、是れ其乳頭は常に損傷を起し易きのみならず、乳腺開口部より、侵入易きものあるが爲であります。

而して間接傳染は、如上の病竈より出す、有毒分泌物の取扱疎略なる爲に、飲食に混じ、或は器械器具其他の物品に附着して、傳染の媒介を爲すものにして、是に接觸したる身體の到る處、創は元より汗腺皮脂腺等の開口部より、侵害を受けるものにして、第二期の末には病毒次第に上昇して喉頭鼻腔に潰瘍を生じ、其分泌物は唾液鼻汁に混じて其傳搬を容易ならしむるのであります。故に患者は常に分泌物の取扱を嚴密に注意し、病竈に、觸れたる手は充分消毒したる上にあらざれば妄に食器其他一般の取扱ふ器物に、觸れる事を避けねばならぬのであります。特に

注意すべきは、入浴にして、若し浴槽内に如上の分泌物痂皮等を遺留するものあらば、末だ皮膚の弱き兒童の頭髮其他に附着して、思はざる禍を爲すのであります併し其注意は、患者自ら反省して混合入浴を避けるにあらざれば、他人の與り知らざるものであります。

以上述ぶる處の、皮膚及粘膜の發疹或は筋骨關節部等の經過後三四年乃至十數年の後に於て、第三期微毒を發生するものであります。此症は第二期症候の如く、皮膚粘膜等を侵す事尠く、主として内臓の諸器官に炎症を起し、護膜腫或は結節疹を生じ又好で皮膚と骨と接近する處に於て、細菌の集團に據る、結節竈を營み、所謂皮下護膜腫と成りて、一定の限局的硬固の腫瘍を爲し、其性崩潰し易くして、其中心部より軟化し、遂に自潰して、護膜腫性潰瘍と成り、周圍組織を蠶食して、遂に

大潰瘍を爲すのであります。要するに第三期の症候は第二期性の如く身體の諸處に散漫する事な、好で一定の限局部位に結節狀の腫瘍を生じ、其崩潰するや、著しく組織に缺損を生じ、内臟諸器官及中樞神經を侵さるゝ時、屢々危険の症狀を呈するのであります。而して梅毒の経過は甚だ緩慢なるも、身體の衰耗に乘じ易く爲に各症大に其趣を異にするものあれど、簡單な説明に許さざるものあれば、以下是れを省略すべし。

軟硬下疳の併發症に就て

軟性下疳は第十圖に示す如く、最初感染の局部に潮紅を呈し次第に腫張して浮腫と成り、更に膿胞を生じて自然に崩潰し、藥品其の接觸に刺戟されて、疼痛を訴へるものであります。硬性下疳は、無痛の小隆起を生じ、次に上皮脱落して潰瘍

と成り、其創面は扁平にして硬結し、周圍僅に隆起するも、軟性の如き浮腫れ、疼痛を生ずる事あらざれば、素人にも能く判然たる、區別を得らるゝのであります。されど爰に區別困難なるは、軟硬混合感染の場合であります。其初發は軟性下疳として、感染の翌日或は二三日にして發生するも、硬性下疳は、其潜伏期間久しくして、普通十日乃至二十日以上、経過したる後にあらざれば、實現せないのであります。故に其初期は軟性下疳として浮腫れを爲し、而して膿胞潰瘍と、一順軟性症狀を経過して、更に疑ふ處なく、梅毒の併發を、知らないものであります。されど梅毒は、一定の潜伏期間を経過したる後に於て、創面次第に硬結し、梅毒特有の症狀を顯すのであります。

横痃、亦軟性症と、硬性症とがあります。其軟性下疳より、招來するもの疼痛あ

りて、遂に化膿崩壊するも、硬性下疳より来る横痃は無痛にして、化膿せざるものであります。されど軟硬混合感染の場合は、其化膿崩壊後に於て、梅毒特異の硬結症状を呈し、創壁及邊緣硬固にして、軟解せざるものあり。故に初期下疳の混合症に、稍々彷彿たるを認むるのであります。而して硬性下疳の経過中、淋巴腺に硬固なる腫脹、即ち横痃の發生は、第二期梅毒の症徴で、最早局處的置處を以て、本病を癒すべからずとするのであります。故に淋巴腺の變化を、認むると同時に、全身驅黴法に據らねばならぬのであります。而して肛圍は梅毒及前記混合菌の侵害に、最も適當なる部位であります。其徑路は、唾液の嚥下にして、既に口腔及咽喉に潰瘍を生じ、爰に滲出する細菌は、食物唾液に混じて、胃腸を通過し、而して肛圍に其病竈を、營む原因を爲すのであります。單純なる毒梅毒菌而已の、侵害を受

くる時は、扁平なる濕疣或は濕性贅肉を生じ、漸次増殖して、恰も數の子を、帶襦赤色に染色したる如き、形狀を爲すも、強き疼痛を訴へざるものであります。去れど其混合感染に據る、病竈は肛圍の皮膚組織を破壊し、而して、周圍の接觸に刺戟されて、疼痛亦堪へ難きものであります。

此際患者は、單に局處の苦痛を、遁れんとする外、適當とする處置療法を求めず時日の遷延は、遂に第三期症状を招來するものにして、特に患者として最も注意すべきは、局處の癒合後であります。癒合心ず無毒を證するのではありません。梅毒症の経過は、前文既に記する如く、極緩慢なるものにして、機會を得る毎に實現せんとするのであります。故に第二期症候時に適當とする、全身的驅黴療法を受けざるものは、必ず子孫に、其病毒を傳へ、愛憐兒の額面頭頸部等に、瘡或は腫物を生

じて、苦しむるもの世間に多く、認むる處にして、所謂胎毒と稱するのであります。去れど此惨虐なる細菌も感染後三年乃至四五年に到つて、其傳染力を失ひ、而して直接傳染は、殆ど罕なるが如く、亦再感の憂なき者あれど、破格なきにあらざれば、油断すべからざるものであります。

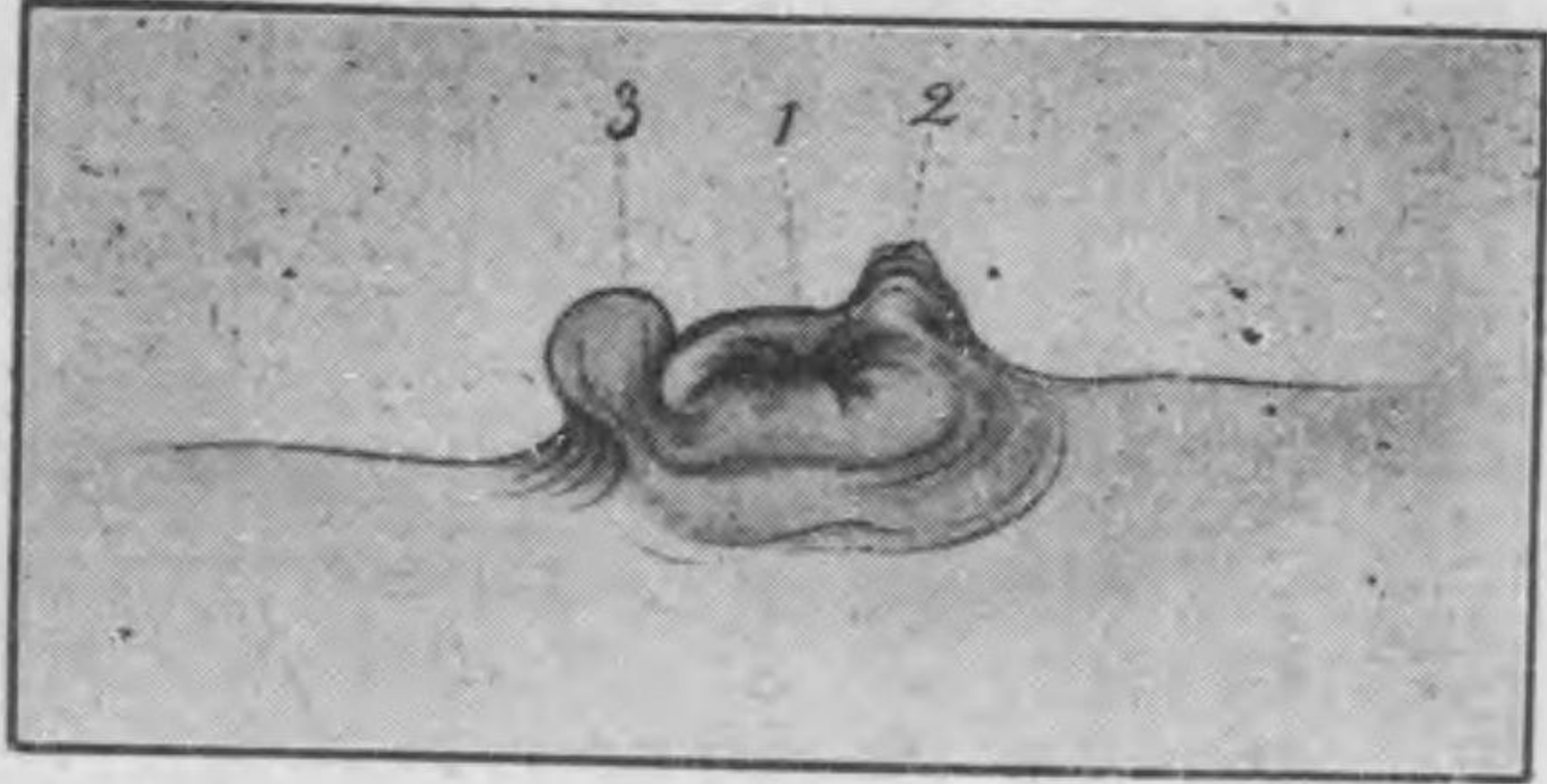
#### 第四章 疣瘡に對する概論

肛門周圍に突起し 或は隆起する總てのものを指して、俗に疣と稱へて其區別明瞭ならざる爲に、屢々間違を生じ、爲に不慮の禍胎を招くもの、尠しとせないものであります。總て肛門周圍に突起するものには、疣瘡の外猶痔核あり瘻口の贅肉結成ありて、治療各々其處置を異にするのであります。若し是等をして同一手段に處す

るならば、危殆忽到るものにして、輕卒なる處置を戒むるものであります。而して其最も間違ひ易く、或は誤認に據つて後日の禍胎を爲すもの、所謂瘻口に生ずる贅肉の結成にして、疣瘡に酷似するものあり。實質形狀毫も異なる處なきも瘻口贅肉の結成には、其尖端創液を漏す開口部あり、常に少量の分泌物を出すものであります。

痔瘻は前章に敘述する如く、其病竈の創壁には、身體自然に具有する、防禦機能に因つて結締組織を營み、據つて細菌の侵襲を防遏するものにして、體力即ち防禦力の衰疲する機會なくば、分泌物漸次稀薄となり經過久しきに亘るものは、分泌物として殆ど認めがたきものあり。去れど病毒猶潜匿して輕微なる瘻竈を爲すあり。其開口部には疣瘡と同一の症兆に據り、同一現象を爲すものにして、唯内部に輕微

第一二圖 肛外隆起物



1 肛門 2 瘻孔贅肉 3 硬性疣

なる瘻竈を有すると否らざるとに據つて疣痔と爲し或は痔瘻と區別するのであります。

如上の場合若瘻口の贅肉を疣と看做して單に切除癒着せしむるならば、日成らず下層に醗膿して、其排泄すべき開口部を失ひたる爲に、蓄膿次第に量を加ふると共に炎症腫脹を招き、比較的軟弱なる、下層組織を侵害して、遂に重態に到らしむるものであります。

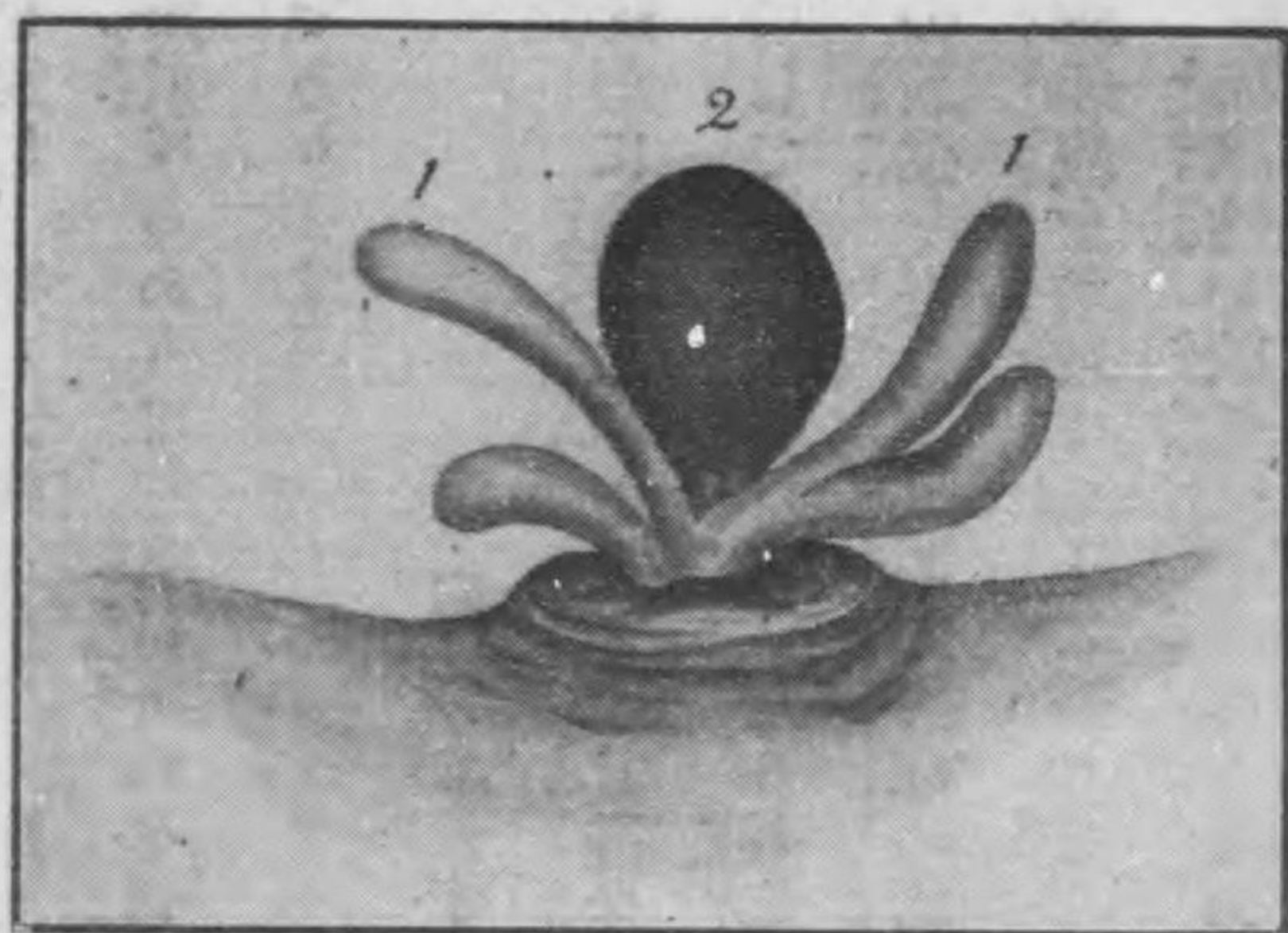
肛内粘膜に生ずる疣痔にして、其形状色彩を一見して、痔核に彷彿たるものあり。去れど痔核は其内部血管に據つて形成するが故に 指頭に觸る時軟弱なる粘

膜組織に觸ると同一 感あり。疣痔は贅肉結成なるが故に、内外共に硬固なる觸覺を爲し、毫も錯誤を生ずる事なきも、時として其下層に多數の血管を抱き、痔核を形成するありて、直に是れを切除せんとせば、痔核と均しく出血の危険を生ずるのであります。

疣痔の生ずる原因及症候

疣痔に軟硬二種ありて、其發生する部位は肛内粘膜、若くは肛孔邊緣に生ずるものにして、其症因は輕微なる外傷後、不斷の便通其他繼續的刺戟に據つて、局處組織の新生を促し、反能的炎症の續發は細胞を集注して、肉芽組織を増殖するものと脂胞組織を増殖するとに據つて、發生するものであります。其肉芽性を硬質疣と爲し、脂胞性を軟性疣と稱へるものにして、其肉芽性硬質疣は、肛内粘膜に生ずるも

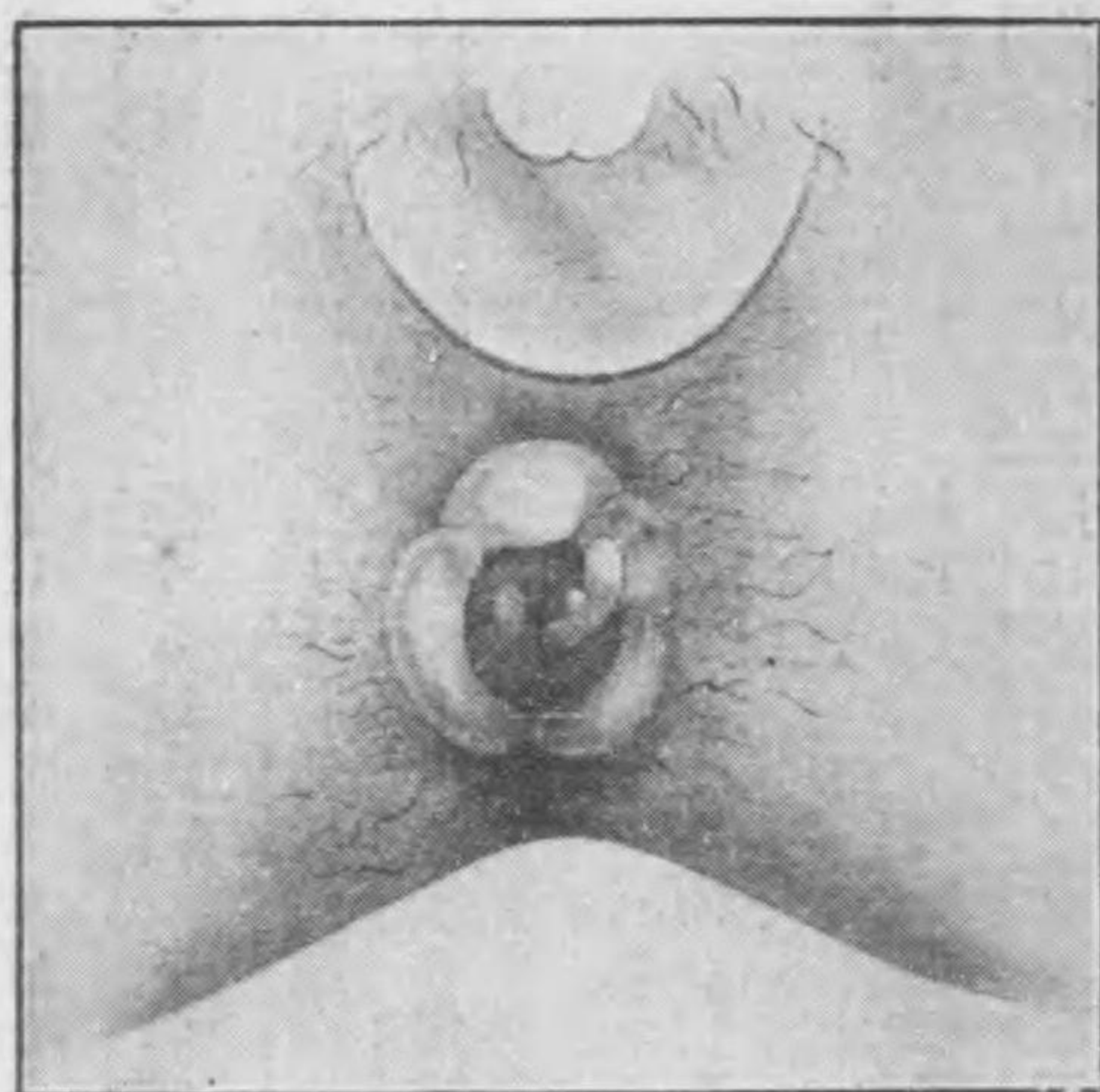
痔瘡發併硬軟圖三一第



1 軟性痔  
2 硬性痔

九〇  
のと、肛外邊縁に發生するとに由つて、其形狀色彩等多少異なる處あるも、何れも周圍組織との境界判然として區劃突出し、球形又は卵圓形を爲すあり。其肛内粘膜に生ずるものは、暗紅色を帯びて痔核に酷似し、肛孔邊縁に生ずるものは、所謂痔瘻の結成贅肉に似て、往々其見解を誤り後日に禍する事は、前項既に敘述する處にして患者自ら原發時及經過中の症候に注意するならば、毫も錯誤なからしむるものと、思惟さるゝのであります。

痔瘡發併核痔圖四一第



施術者の誤認に據つて、後日不良なる結果を生ずる者ありとするも、患者再び以前の施術者に處置を求めざるものにして自己の處置に基く後日の結果を知る由なく、爲に幾度か前非を繰り返さるゝのであります。

而して痔の原發時と、輕症なる痔瘻の初發とは、殆ど其症徴を同くするものにして、痔の症因は外傷より生じ輕微なる痔瘻は外傷或は微細なる膿胞より生ずる事あるが故に、痔瘡との區別判然たらざるも、専門的に日常扱



ふ者の目には 一見直に識別する形態を具ふるものであります。第三圖は肛外に生ずる硬性疣と瘻口に生ずる贅肉結成との併立する處を示し第十三圖は肉芽組織の結締より成る肛内硬質疣と脂肪組織の増殖より成る軟性疣との併發したるものにして第十四圖は痔核面に増殖する軟性疣の併發を現したるものであります。

### 第五章 痔瘡に對する概論

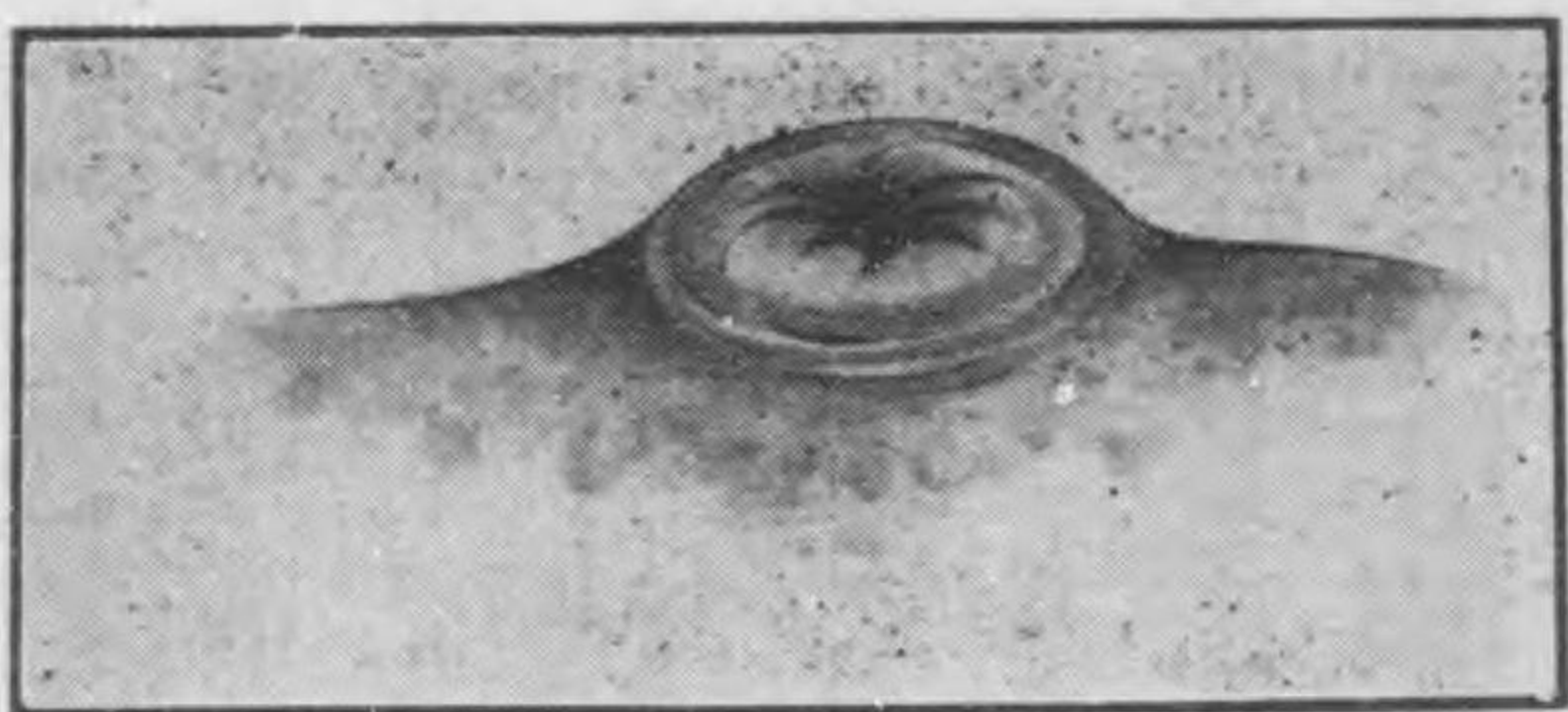
痔瘡は皮膚病の一種にして、植物性微性物又么微寄生生物と稱する。至微不至なる生活體が、皮膚の表層に寄生するを、症因とするのであります。是等微性體の寄生に據つて生ずる。此皮膚病には、癬風、白癬、疥癬、匍行疹、頑癬、痒疹等の種類或は其異名多きも就中痒瘡の病原體を爲すものは、癬瘡所謂截髮匍行疹或は痒疹

一名糠枇疹又血風瘡を主なる原因とするのであります。

特に該病の發生に據つて、最も苦痒を訴へる部位は肛圍及婦人の陰部であります。

面して運動摩擦飲酒等に由り、血行に變調を來し、爲に體温の増加するに伴ひ、寄生菌より産出したる。毒素「トキシシン」の凝液を溶解するが故に、細胞及末梢神經を刺戟して、強き苦痒を感ずるのであります。故に局處の搔擦は、増々炎症を誘發して、一層痒癢の度を強くするのであります。(第十五圖參照)

第一五圖 痒瘡



蓋し局處の搔擦に因る炎症は、漿液の集注を促し、毒素「トキシシン」を融解して、

漸次稀薄ならしめ、或は無毒ならしむる爲に、苦痒を消散せしむるのであります。  
 本病の原因症候は、以上簡單なる説明に據つて、悉されるのであります。蓋し其病原體を爲す寄生菌の説明に到つては、細菌學或は植物學者の、説明を俟たねばならぬのであります。故に爰には其詳細を悉し得ざるも自己の疾病に對し直接是れを處置し、或は治療を圖る上に、多少參考となり、據つて利する處尠からずと思惟するが故に、左に其概略を付記するものであります。

病原體を爲す微生物に就て

總て諸多の炎症性疾病及傳染性諸病が、么微生物の侵襲、或は其寄生に據つて招來する事は近時諸家の研究に據つて、判然されたのであります。今其病原體と成る么微生物が、自己に具有する毒素に據つて、各異なる疾病を醸し、人體を害するに

到る迄の順序を、簡單に論及せんとするものであります。

柳病原體と成る么微生物に動物性と植物性とがあります。其動物性に四種あり。

即ち有毛蟲、胞子蟲、浸滴蟲、足根蟲であります。亦植物性に四種あり、即ち分裂菌又細菌、絲狀菌又微菌、芽菌又醱酵菌、毛狀菌であります。

而して動物性有毛蟲は、一乃至數個の鞭毛を具ふる爲鞭毛蟲の名あり、腸に寄生して遂に血液中に侵入す。

胞子蟲は分裂に據つて繁殖し、主として動物體血液中に寄生し「マラリア」の病原體を爲す。浸滴蟲は全體無數の纖毛を有する爲纖毛蟲の名あり、口及肛門を有して榮養を營み主として大腸に寄生す。足根蟲は動植兩物に寄生して、運動及榮養を營み形態不同なるものであります。

植物性分裂菌所謂細菌又「バクテリア」は其繁殖最も早く、菌體順次分裂して一個は二個と成り更に四個と成り八個十六個と増殖する爲に、分裂菌の名を爲すのであります。植物學者「フルネツゲ」氏の算定には、一個の菌が廿四時間中に、千六百萬に分裂すと云ふ、實に驚くべき繁殖性を有するのであります。

絲狀菌即ち微菌は其名の如く、絲狀に發育延長するものにして、其繁殖は各々異なる芽胞を生じ、一定の發育後其尖端に具ふる、芽胞球を破裂せしめて恰も蒲公英の種子の如く外界周圍に飛散するものであります。

芽菌菌所謂酸酵菌は、圓形又は卵圓形を爲す細胞にして其繁殖は、母菌より娘胞を芽生して分離する事なく、娘胞熟して順次芽生するものであります、而して特に酒釀に缺ぐべからざるは「サッカロミ―チエス」と稱し、糖質を酒精化するものであり

ます。

毛狀菌は軟弱なる絲狀菌にして其繁殖は絲狀を分枝するあり亦否らざるあり。

以上記する外諸家の未だ驗微鏡下に認め得ざるものありて病理上其症狀が傳染性寄生物に因るは疑ひなきも天然痘、猩紅熱、麻疹、狂犬病の如く未だ其病原體を發見せざるものあり、是れを不可視性或は濾過性病原體と稱へられるのであります。

而して上記微生物の外地球上に散漫する云微生物は其種類頗る多く或は有機物を腐敗せしめ、或は生活體の動植物及人體を侵して危害を與へ或は死滅せしむる等有害有毒菌の外亦無害無毒菌も多く存在して猶其悉くを區別し得ないのであります。今外科疾患に最も關係深き、分裂菌に就て猶其詳細を悉さば、是れを三種類に大別

して、其一、球状菌と稱し圓く球形を爲すもの一は桿状菌と稱して細長く棒の如き形状を爲すもの、一は螺旋状菌にして恰も栓抜の如く旋回したるものであります而して傳染的刺戟に由つて炎症を招來するもの主として如上の么微寄生物、就中細菌の傳染に基因する事は各症既に論及する處にして、是等細菌が各々特異の毒素を産出して局處的疾病を爲し或は全身の疾病を醸すのであります。蓋し微生物も所謂一の生體なるが故に、其發育に必要な養素を得んとして、適處を得れば直に寄生し、或は侵襲せんとするのであります。其寄生を防ぎ其侵襲を許さずと爲すもの即ち豫防であります。既にして彼等細菌の寄生或は侵襲を受け、其産出する毒素の爲に、身體の一部若しくは全身の健康を害する。有毒作用を除かんとするもの、所謂治療であります。

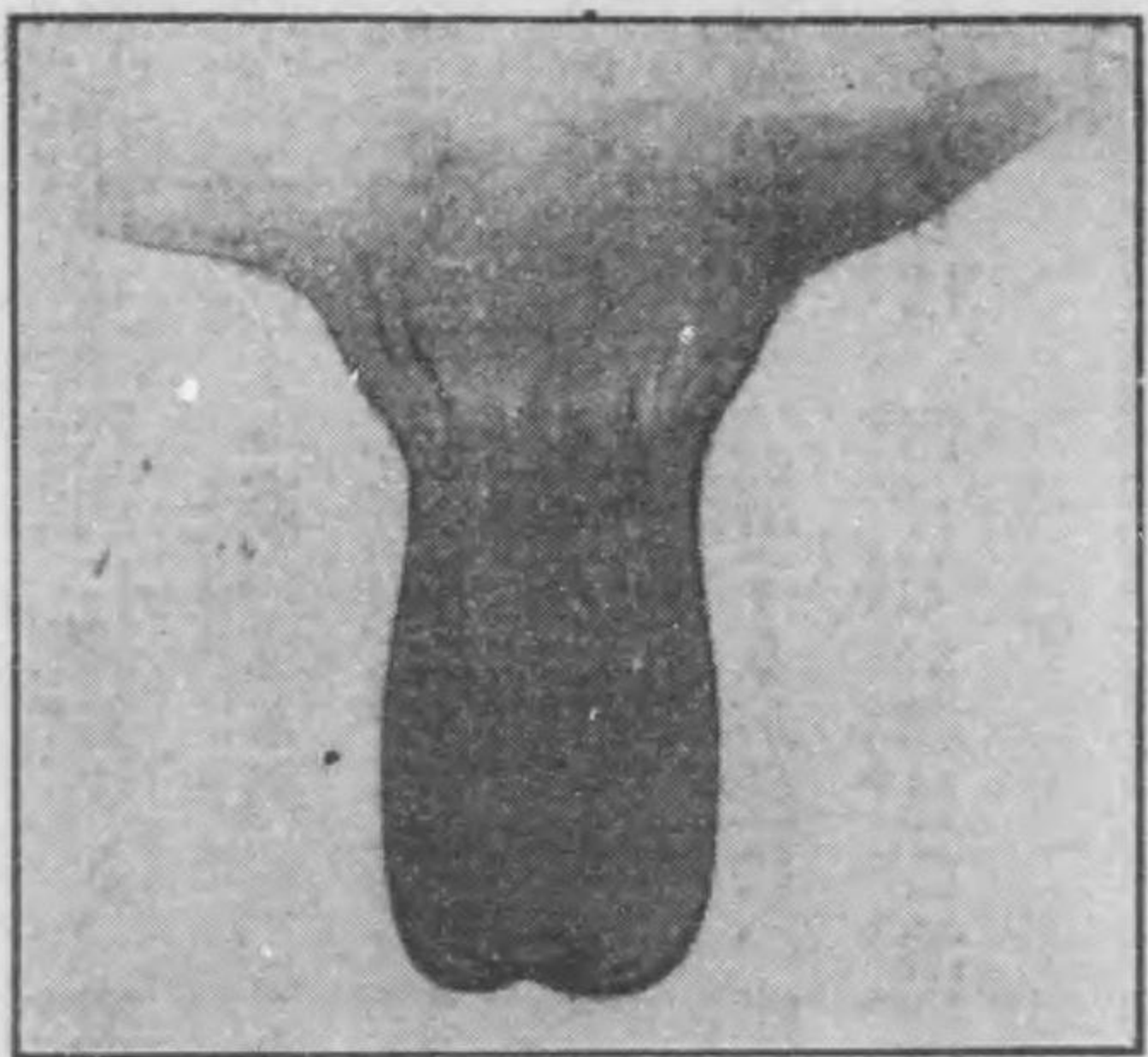
蓋し痒痔は絲狀菌に隸屬する、微菌の寄生に基因するものにして、物質代謝機能に因つて微菌より産出する毒素「トキシン」の外、菌體固有の毒素が、該菌の死渣より遊離して、神經及細胞を刺戟するが故に苦痒を感じるものにして是れを「エンドトキシン」と稱へるのであります。而して體温の變調或は外界よりする、熱の爲に毒素の凝液を溶解するが故に、痒覺作用を生ずるのであります。故に是を在再抛擲するならば、何日迄か容易に治癒せざるのみならず。増々蔓延せんとするのであります。

特に異なる痒因として腸内寄生蟲の爲に肛圍を刺戟さるゝ事があります。即ち蟻蟲の發生にして、其肛外に出んとし或は養素を需めんとして、肛圍を刺戟するが故に痒癢を訴ふる場合あるも其療法は唯寄生蟻蟲を驅除するに據つて癒るのであります。

第六章 腸痔(一名直腸脱)の原因及症候

此症小兒に多くして、其原因種々なるものあれど、主として母體の虛弱及授乳

第一六圖 腸痔一名直腸脱



不足の爲に、常に不適の食物を與へ或は母の飲食乳兒に適せざるものありて爲に小兒の胃腸を損じ、榮養不良に陥り或は體力虚脱して下痢を續發する等、自然に肛門括約筋を弛緩せしめ、或は腸の提吊力に弛みを生じて遂に直腸の脱出を招くのであります。而して脱出其度を重ね遂に便通毎に習慣を爲すもの

で時として大人に猶此症を爲すものあれど、多くは前記習慣を制する適當の處置を需めざるもの、或は大酒常に其度を過して胃腸を損じたる者に、多く原因するものであります。故に妊婦は常に其適するものを選び就中榮養に富みたる、食事を攝らねばならぬのであります。而して母乳不足する時、或は母乳不良の症を爲す時、是に代る小兒の食物は、消化易くして胃腸を害せざるものを選びねばならぬのであります。(第十六圖參照)

## 第二篇

## 第一章 痔核嵌屯療法

痔核は前編に詳記する如く、常に肛内に潜在する期間、格別苦痛を感ぜざるも、便通時之が肛外に押出さるる時、括約筋の緊約に據つて、疼痛を訴へるのであります。

而して嵌屯療法は前記括約筋の緊約を利用して、之を萎縮消散せしめんとするのであります。故に此療法を行はんと欲するなれば、可成的痔核を、肛外に押し出して其溝部を、充分緊縛せしめ自然に萎靡消散する時期の到る迄は、痔核を肛外に引込ましめざる様注意を必要とするのであります。

斯くて此際括約筋の壓迫は、痔核及肛圍組織に、異常の刺戟を與ふる爲、局部組織は一時的炎症を招來し痔核及其肛圍は鬱血充血相伴ふて腫脹膨大し疼痛又次第に加はるものであります。去れど以上の症候は、痔核を嵌屯せしむる意義に、最も適應するものにして、従つて痔核の大小括約筋の強弱は、據て苦痛の程度に差異を生じ、其劇痛は亦必ず、此療法の樞要なる目的に適ひ、無痛即ち此目的に遠避かるものであります。

痔核の脱出は肛内發生の部位及其形狀に據るものにして、小なるも能く便通を障礙し、大なるも尙ほ便通を妨げざる位置に存在して、脱出の易からざるものあり。

即ち第四圖は肛内に痔核を有するも未だ未熟なるが故に脱出せざるものにして一は肛外の鬱血を示し一は便通時僅に肛孔を視視する處を示すものであります。勿論

此療法の目的には副はざるも、如斯痔核は常に堪へ難き苦痛を訴ふるものにあらず、所謂括約筋の緊縛に、與らざるものにして、痔核小なりと雖も完全なる括約筋の緊約に適す。ものは一晩の苦痛を覺悟せなければならぬのであります。

而して其疼痛期間は、約五六時間、永くも十時間の後に到つて次第に緩和さるゝ事が一として違はないのであります、去れど特に痔核の膨脹巨大にして稀には夏密相大を爲すものあり、一晩の緊縛猶其目的を遂ぐるに足らざるものあり、而して痔部の嵌屯を完全せんが爲に猶翌晩に痛みを持続するものなしとせざるも、其巨大なる痔核は極めて罕なるものであります。

痔核嵌屯療法の、樞要なる目的とするもの、即ち局部的血行の遮断であります。此血行遮断は、普通の血行障碍と異り他に影響すべき、何等の復作用を伴はないの

であります。元來痔核は、前編已に其原因を詳記する如く、血管障碍を主因として肛内粘膜組織を擴張し多數の毛細血管が、分岐的集團を爲し溜血爲に突起を生ずものにして、此隆起部分の血行遮断は、靜脈本管に何等障碍的影響を與ふべき性質のものにあらず。其之を緊約し、壓迫を受くる時、爰に鬱滯する血液は、逆に本管への還流を、餘義なくせしむるものにして、此際時間の経過は漸次にして溜血の吸収と成り、従つて隆起物の萎縮と成るのであります。故に此際に於ける括約筋の緊縛強ければ、それ尠有利の結果を齎し、疼痛の度加はると共に其目的は刻々に進行して居るものであります。疼痛纏て其絶頂に達して後次第に緩和され、先の苦痛は其度に應ずる効果を現し、而して永遠に、病苦を遁れるのであります。故に其苦痛は需めて得べからざる意義を存し是を忍ぶ上に尤も意を慰むるものと思惟するの

であります。

以上の説は空理に近き机上の論に非ず、貳百年來一貫する實驗より得たるものにして患者若此説に倣つて違ふ者ある時、責任以て質問に應じ能ふ限り同病者の便宜を圖り、以て救済の實を全ふせんとするものであります。

而して最初四五時間の苦痛は此壓迫より來る腫脹期であります。腫脹其限度に達し終れば續て消散期に入るのであります。其消散期が五六時間乃至十時間の後には必ず實現して、疼痛を緩和するのであります。百的百中違はざる結果ありとするも普通患者としては其前途を測知するに、準據するものなく亦深く經驗する所あらざるが故に苦痛の加はると共に、不安交々も到り、強て其復納を圖らんとするのであります。

若し異常の腫脹に據つて復納ならざる時あらば、苦悶と不安相踵で起り、爲に種々の傳説に惑ひ、不合理なる處置を取り或は藥品の刺戟を受け益々炎症を誘發して一定の消散期を永からしめ却て苦痛の度を強からしむるものであります。

神佛の祈願呪咀、が効ありと爲す、即ち一定の消散期自ら到るからであります。周章狼狽何等効を爲さず、却て苦痛を増發せしむるものなれば、唯此際靜に一定の消散期、即ち五六時間乃至十時間の経過を待ては足るのであります。

痔核脱出時の疼痛は所謂前記の理由あるが故にして括約筋の緊縛、亦其局部腫脹を増大し炎症鬱血は苦痛を招來し其消散萎縮は、漸次に苦痛を減少する。爰に一定の時間を必要とする。亦當然たるものであります。此の療法を行ふに當り、最も肝要とすべきは嵌屯期間の初め十時間あります。是れに堪へると否とは永遠苦樂の



分岐點を爲すのであります。而して著者の説に信賴して、此療法の可否を決するも疼痛時の十時間、亦此療法の樞要なる意義を爲すものと心得ねばならぬのであります。

痔核が嵌頓療法に適當とする症候時

第一便通時常に脱出する痔核を其都度に押込まねば自然に復納せざるもの、第二常に脱出せざる痔核が何かの強き刺戟に據つて、異常の膨脹を爲して、脱出したる時第三常に脱出する痔核を容易に押込を遂げたるもの、或刺戟の爲に、異常の膨脹を爲して押込不可能とする場合、以上三つの機會が最も適當とする時期にして普通は押込を以て一時の處置とすれど、其根本的治療手段としては此機會を逸してはならぬのであります。殊に第二の場合、一時的の症狀にして自然の萎縮は遂に其

機會を失し次回の脱出は、公務家業の多忙にして適當なる時機は亦脱出容易ならざるものあり、即ち多忙時に於ける身體の疲勞は亦能く脱出を原因するものであります。故に以上の三機會に遭遇する時、自ら處するに此嵌頓法が、最も其宜に適ひ、最も安全なる療法として、推奨するものであります。殊に第三の場合、其目的を遂ぐる爲に態々出して、苦痛を忍ばんとする者には多少躊躇する處なしとせざるも既に脱出して、復納ならざる時に於て爲れば新なる決心を要せないのみならず復納の成らざる時は所謂括約筋の緊縛強く従つて痔核の膨脹巨大なるが故にして此場合嵌頓療法に伴ふて此温療法他に匹儔を許さざる効果を齎すものと力説して憚らないのであります。

痔核は前述の如く肛外に之を嵌頓せしむる時、亦新なる血行障礙の伴ふものにし

て、鬱血充血相繼で招應し、第三圖に示すが如き形状を爲し、其大なるは夏密柑の如く普通は圖面大なるを多とし、小なるは指頭大に過ぎぬものあれど其苦痛は宛痔核の大小に因つて、差異あるにあらず。括約筋の緊縛力強弱に基くものにして亦其人の忍耐如何は他の測度すべからざるものであります。

翻て以上の説明を案する時、嵌頓期間の十時間に多少不安の度を強くせしやの感を爲すあり、されど著者の非才、克く實情を穿つ能はざる罪にして其苦痛は耐へがたき程度のものにあらず、是れを他の療法に比較するも猶其半にも到らざるものあり、貧血其他の病弱者にも充分耐へ得べき事を特に附記するものであります。

温療法が痔核に及ぼす作用

痔核に對し温療法を實施繼續する、時、痔核の外面より漿液及び粘液分泌物の多

量に滲出するを見るべし、是即蒸熱温療法による反應的消炎作用にして續て痔核外面の表層組織に壞疽症狀を呈すべし。是又括約筋の緊縛、據つて表皮組織の營養たる血液分佈に障礙を與ふるからであります。此際最も注意すべきは、痔核表面を清潔ならしめんとして強て附着物の剝剝を圖り或は便通後の痔核面を拭ふ爲に壞疽纖維を剝離し爲に出血の原因を招來する虞あれば、總て不潔物其他の粘液物を除去する際、痔核面を拭ふ事を避け、軽く脱脂綿にて壓へ其用を遂げ而して壞疽纖維は自然の離脱を待たねばならぬのであります。

斯くて壞疽纖維の自然離脱と漿液粘液の分泌物と相伴ふて、痔核は漸次其外形を萎靡縮少する傍、蒸熱温療法が全身血液に進達作用を爲し血行之が爲に旺盛と成り物質代謝機能を増進して局所の榮養状態に變化を生せしめ、併して溜血或は滲出物

の吸収を容易ならしめ、筋神経亦此温熱の刺激を受け、括約筋の弛緩是れに據て漸次回復するものにして、家傳の意義爰に存し、藥品の作用亦其効果を現し、而して處置藥品相俟て其目的に適ふものであります。

説明爰に及んで外用貼布薬が、痔核に對し根治的效果を收め得べき、可能性ありや否は判然と了解出來得るものにして、賣薬の能書は其内容に於て如何に盡したるものありとするも與つて効果を齎す。性質のものにあらず、著者の製劑に係る服薬外用薬も處置に伴ふて始めて根治的效果を生ずるものにして、唯無意義に貼用すれば一時的の症候處置に過ぎないのであります。

安永膏使用に就て

此冊子は藥品の能書を意味するものに非ざる爲自家製劑の効果を云爲する事は絶

對に避ける考へであります、されど此療法を實施するに當り必要缺くべからざるものあれば自然其用途に伴ふ効果の一端を説明せざるべからず。而して温療法の意義を闡明ならしめ、因て過なからしめんと思惟するのであります。

總て賣薬の能書廣告等には、文飾的商策的の加味するもの多く故に賣薬の能書と言ふ種の代名詞に用ひらるゝ事が一般承知さるゝ處であります。賣薬は總て素人の専用を目的とするが故に萬一を顧慮する趣意の基に其使用藥品に一定の制限があります。されど能書中には其疾病に對して能ふべからざるものあるを屢々見聞するのであります、今著者の製劑に關る安水膏を使用するに當り家傳たるの故を以て痔核痔瘻の如き難症が其貼用に據て根治する意味に使用さるゝは大なる間違ひにして絶對不可能である事を心得て貰ひたいのであります、而して此藥品を如何に應用

すれば豫期の効果を収むるかに就て説明したのであります。

總て外科的處置に應用さるゝ藥品は防腐的制腐的處置に、適合する藥劑を應症的に撰擇して調劑さるるものであります。勿論専門醫家の使用する藥品中には腐蝕的處置に適する劇毒藥の應用さるゝものあれど賣藥として許可すべからざるものであります。故に其配伍が如何に善良なるものありとするも病症其物が根治的効を現す性質にあらざるを知らねばならぬのであります。

今日の發達せる外科醫術に於てするも、猶完全なる療法に乏しき痔核に對し、賣藥の貼用に據つて根治せしめんとする考は最初から間違つた要求なのであります。併し此說に據つて總ての賣藥を非難するものではありません亦劇毒藥宛効を收むるに限らないのであります。唯自己の専門的見地から、痔核痔瘻等の外用劑として

安永膏を使用する上に必要な注意と心得て貰ひたいのであります。

然らば是れが應用に據つて如何なる作用を齎すか即炎症刺戟を緩和せしむる外痔核面の保護に過ぎざるものにして所謂症候的臨機の處置であります。而して炎症刺戟が緩和さるゝ時、血行舊に復し滲出物は自然に吸收さるゝ等の効果ありと雖も既に慢性的痔核或は痔瘻等に對しては外用藥の遠く及ぶ所に非ず、唯外界の接觸的刺戟を避くる、保護手段に過ぎぬものと心得て差支へないのであります。

殊に痔瘻の如き膿瘍に對し餘り殺菌力強き藥品を使用する時、孔口のみ早く癒着せしめ、却て不良なる結果を醸する虞れある事を心得ねばならぬのであります。痔瘻の説明を参照すれば、猶判然すべきものであります。

故に此溫療法を應用する痔核嵌頓療法は必ず安永膏を使用するに限らないのであ

ります。應症的に適ふ藥品であれば何を使用さるゝも敢て差支へないものと心得て貰ひたいのであります。而して自然的意義に適ふ、此嵌頓療法が一般民間に通曉して可成的危険の件ひ易き療法を避けられ與ふ限り多く此病者を救済し得るならば、後援者は元より著者も亦満足とする處であります。

### 第二章 温療法が痔瘻に及ぼす作用

温療法が物質代謝機能を増進すると共に血行を旺盛ならしめ且つ栄養状態に佳良なる結果を與ふる事は前章既に叙述する處にして之を痔瘻に應用さるゝ時、其温熱が病原體に對しては直接消毒作用を爲す外、病竈の周圍に存する反應性炎症を助長せしむるが故に血液性細胞及血清の集注を促し、而して組織の新生を増長し、其缺損

を補足して漸次病竈を健康體より分離せしむるものにして所謂組織細胞の増殖は遂に寄生細菌の根據を奪取して棲息の餘地なからしむるが故に創は容易に皮膜を爲すのであります。

故に温療法は外科的一般創傷に對し外用防腐の藥効を補助して直接細菌の死滅を餘義なくせしむる外間接には實性充血を促し該部位の榮養を佳良ならしめて肉芽及表皮の發生を促進するものであります。而して温療法を實施する時創面に濃厚なる濃液の多量に沈着するを認むべし、是即温療法に對する反應的炎症性産物にして該反應が此療法に最も重要な意義を有するものであります。而して汗腺機轉の萌發に發生するのであります。

### 温療法に食事制限を必要とせざる理由

前編既に敘述する如く總て創傷に對する一般治療の主とする要緊は創面の清潔に如くものなし其清潔を保たんが爲に切開及び防腐的藥品の必要を生ずるのであります。して切開後の痊癒手段として防腐薬を善用し依て創面を保護せんが爲に寄生細菌の増殖を制し或は外來微生物の竄入を防ぎ亦是れを遮断せんとするものにして此目的を遂行する爲に食事を制限し排便を制止するの必要を生ずるのであります。去れど是等の防遏手段が如何に嚴密なるものありとするも肛圍は是れに依つて普通手足に處置する如く完全に遂げ難き位置に存在する爲豫期の如き効果を得る事が至難なのであります。加之防腐的處置は如何に善良なる防腐薬を以てするも其實際に處して確實なる消毒の望むべからざる事は諸家の實驗に徴して明かなるものであります。強て是れを無毒ならしめんとして強き防腐薬を使用する事あらば過度の刺戟

を蒙り爲に組織の活力を鈍麻せしむるか故に細菌に對する抵抗力を減殺され依つて治療機轉を阻害するのみならず、往々防腐薬の中毒に由つて危険を招來するのであります。故に現今の外科處置として漸次防腐薬の應用を避け成るべく無腐的に處置せんとするに到つたのであります。されど其創傷を無腐的ならしめんとするには第一に外來の微生物を防遏するに必要なる設備を要するのであります。大氣中に浮遊する微生物は到る處に散漫して術者被術者の被服は勿論、皮膚器械器具綑帶材料等に附着するものにして、此等の消毒を嚴密周到に行ひ得べき完全なる設備を必要とするが爲に是れを備ふる病院にあらざれば、普通家屋内に於て全く行ひ得べからざるものであります。

故に一般諸家の痔瘻に對する現今の治療手段は成るべく無腐的に處置して、組織

に具有する、自然の抵抗力を強健ならしめ依つて其治癒を速かならしめんと努むるに到つたのであります。而して其處置を可及的嚴密の内に行はんと欲する爲に便通制止の必要を生じ従つて食事を制限さるゝのであります。乍併其制限は一方に於て體力の衰憊は自然通るべからざるものにして其衰疲は纏て病毒に對する抵抗力を減殺して治癒機轉に重大なる損害を爲すものであります。身體自己の具ふる防禦機能に依つて細菌の侵襲を防遏する力は外用防腐藥の遠く及ばざるものあり、故に食事制限の爲に此重要なる機能を滅却する事は亦便通の害に比すべからざるものであります。外面より行ふ防制腐の處置が如何に嚴重なるものありとするも實際に於て總ての病竈を無毒の新創と爲し得べからざるものであります。畢竟組織内に潜匿する細菌は、周圍組織を害せざる程度の防腐藥に依りて悉く死滅を望むべからざる

が故にして、外科諸大家の均しく認證する處であります。故に一般化膿性病竈、特に肛圍に發生する痔瘻に對して最も必要なる處置とするものは所謂切開手術に依つて病竈内に發生する有害創液を排泄するに適當とする手段を尙ぶのであります。防腐藥に依る處置が病竈全體を無腐無毒たらしむる事を得ざるものとせば、身體自然に具ふる、防禦的抵抗は寸時も必要の缺ぐべからざるものであります。痔瘻手術後の經過に不良なる結果を生ずるもの宛排便其他外來微生物の侵害と而已據るものにあらず。畢竟手術に猶盡さざるものありて、表層皮膜の殘存するが故に蓄膿或は創液の排泄易からざる結果にして寧其原因は手術の不備に屬するものであります。

痔瘻に贅肉を生ずるもの即手術未だ全からざるが故にして病菌は比較的防腐藥

の及ばざる位置に多数群簇を爲し據つて組織を刺戟するが故に生ずる現象にして所謂防備的組織細胞の築牆に過ぎないのであります。此際其贅肉の切除は何等意義を爲さざるものにして、其據つて生ずる原因を除かざるべからず。即膿或は創液の停滞する表層の皮膜、其他の障碍を解放せざれば効を爲さないのであります。

痔瘻は肛圍を病原的區域とする爲無腐的處置を至難とするものにして防腐的處置亦往々にして不良の結果を醸し易く爲に可成的清潔を保つ意味の下に普通は排便を制止したる後に於て手術する事は周知の事實にして温療法に其必要を感せずとするもの既に前項に温療が痔瘻に及ぼす作用として説明する如く温熱が薬品の作用を幫助して肉芽を促し、而して治癒機轉の萌を早くする爲に創液の滲出を抑制する事も迅速なるものにして創腔濶大ならざるもの殆ど漿液性の分泌物を認めざるものに

して手術後の温療僅に三十分にして疼痛を止め一回約二時の温療は止血全く調ひ四五時間の経過は最早排便に堪へ歩行又容易なるものにして手術後更に安静を必要とせないのであります。故に其使用薬品は創面を刺戟するが如き強力なる防腐薬を用ひざるものにして猶よく第一期の癒合期を早からしむるもの蓋し血液及漿液性分泌物の滲出を迅速に抑制し得る結果にして老羸者虚弱者病衰者に對し手術を行ふも温療が血液の循環に依つて全身の體温を保つのみならず。止痛最も早くして虚脱的危険症は毫も招來する事なく術後二三日にして早くも創面に濃厚なる膿の沈着するを認むべし是れ所謂第一期癒合の症徴にして最早運動の自由を得るのであります。普通防腐的處置に於て一週間乃至十日を必要とする第一期癒合期が如此迅速なるもの即温療が反應性炎症を増長せしむるに適切なる關係を有するからで



あります。

### 治癒機轉に就て

第一期癒合は即肉芽の發生であります。而して肉芽の發生は身體に具ふる自然防禦の初萌にして創壁を處置するに其刺戟を減少するものであります。故に肉芽發生の遅きものは其間創面を處置するに非常の苦痛を感じなければならぬのであります。加之温療は神經を融和する爲に新創に對する止痛最も迅速にして他に其匹儔を許さざるものあり、故に不全痔瘻の如き簡單なるものに至つては手術後僅二三時間の温療後に於て家事其他の事務に服するものあるを陳敘して實地家の信すべからざるものであります。

其是れに使用する藥品宛特別の効を有するにあらず。既に上述する如く防制腐的刺戟藥品を多く用ゆる事なく唯單に外壁の接觸刺戟を避くると創壁の癒着を防ぐに足る即創面保護に過ぎぬのであります。

上層の癒着は括約筋の緊縮常に創壁を密着せしむる爲にして治療經過中最も厭ふべき弊害であります。而して梅毒或は其混合感染。結核亦是其混合感染の如き強き侵襲力を有する病竈に於ては上層の癒着するを認めず。是れ普通の病竈菌が侵襲力に乏しきを證するものにして強力なる防制腐薬を必要とせざる所以爰に存し其治癒機轉が主として自然的防禦機能に胚胎する事は争ふべからざるものであります。所謂食事制限の爲に身體自然に具有する防禦機能を衰憊せしむる事の頗る不利なるものと思惟するは以上の事實を認むるからであります、而して自然防禦を補助して其活々潑々たらしめんとするもの將して何を必要とすべきか勿論滋養ならざるべか

らず。亦自由運動其消化を助くるが故にして温療獨り其効を爲すにあらず。防制腐の處置に於ても其利する處同一ならんと思惟するのであります。

終りに臨んで注意すべきは瘻竈の手術にして創液其他不潔物の溜滞すべき障礙を除き總て開放的を尙ぶのであります。而て全痔瘻の如き創壁の互に密着するを防ぐ爲、適當なる藥品を挿み其上層癒着を防ぐ事に努めなければならぬのであります。次に注意すべきは入浴であります。自由運動の適ふものにして入浴は必要ありとするも自然防禦の未だ全からざる創面を浴槽に浸す事は最も危険であります、されど手術開放的にして癒着の悞れあらざる肛外病竈は肉芽完全したる後に於て入浴するに毫も差支へざるのみならず。膿及創液中に含有する有害なる産出物及其化合物を融解して創壁を清潔ならしむる爲に表皮の發生を易からしむるものであります。

ます。

茲に竈腔深くして其竈底の肉芽容易に發生せざる痔瘻には入浴を忌むのであります。即上層の癒着を招くからであります。病竈の空洞未だ補充成らざる時、入浴の爲に其邊緣のみを消毒さるゝが故に瘻口に贅肉を生じ易からしめ、爲に創壁の癒着を餘義なくせしむるからであります。贅肉なるもの必ず贅とすべきにあらず。病竈未だ消毒全からざる時、比較的清潔なる一部分に細胞を集注せしむる現象にして爲に益々病竈の消毒を妨げるものにして發芽の効を爲さないのであります。邊緣既に肉芽充分なるものあるに深き竈底に肉芽の後ろゝは創液の常に溜滞して清潔ならざるが爲であります。而して其清潔を圖るは外用薬の交換に伴ふものにして膏薬の使用に吝ならざるを可とするのであります。

第三章 濕療法が濕痔に及ぼす作用

濕痔は前編既に説明する如く微毒第二期の症状である爲に其病毒は全身血液の中に存在して最早局處的處置は本病の全癒に副はないのであります。而して局處的療法に適する期間は硬性下疳の初期にして病毒未ぞ感染局部に限制され他に移動せざる間に、効を收むるものにして其處置之に適するなれば勿論第二期の症候は招かないのであります。されど既に血管を侵し第二期症徴を認むるものあれば全身的驅微法に依るの外、局所的處置は據つて本病の癒すべからざる事を知らねばならぬのであります。故に最初局所的處置中に於ても其處置が微菌の全死滅に適せずして漸次淋巴腺に異常を來す時は局所療法と共に直に全身驅微法を需めねばならぬのであ

ります。

全身驅微法として古來民間に於て宣傳せらるる、藥品中には萬病的一種の下痢劑を服して、病毒の排泄する如く誤解さるゝ爲に効果の疑はしきもの、或は全く何等の効なき藥汁に貴重生命を賭して、晏如たるものあり、爲に其機を失して、自己を害し他を毒し、子孫に傳へて厭ふべき症因たらしむるもの尠からぬのであります。微毒は胃腸内に存在する寄生菌にあらざれば下痢に依つて微菌を排除し得べからざる事を知らねばならぬのであります。俗に能く下ると稱して、宛病毒を下すが如く考へ矢鱈に下痢劑を服して消化を害し爲に切角食する貴重滋養物を其儘漏泄せしむるが如きは策の得たるものにあらず。却て體力を衰憊せしめ抵抗力を減殺するが故に病毒の乗ずる處となり、全身到る所に組織を侵して、皮膚發疹或は局所的

潰瘍を生ぜしむるのであります。特に注意すべきは、外科的局處療法に依つて病竈は治癒するも第二期症に於ては全身驅微法を行ふにあらざれば其癒合を以て全癒と見做してはならぬのであります。而して内服薬に依る驅微法は其薬効を血管内に導き而して微菌の死滅を圖るのであります。故に水銀劑ヨード劑の如き胃腸を害するものには健胃劑を與へ滋養強壯の食事を攝らしめ便通を滑にし飲酒喫煙を禁じ、適宜の運動を必要とする等嚴密なる攝生を守らねばならぬのであります。

身體の衰疲は孰れの疾病にも利すべからざるは勿論にして特に傳染的疾患には最も忌むべきものであります。而して滋養物は口に味ひ胃中に收めて足るべきものにあらず是れを消化せしめ血管内に吸収して初めて効を爲すのであります。其消化吸収の全からざる滋養物を無暗に洩泄するの不利は明瞭なるものであります。下劑の必

要は、消化吸収せし殘渣が腸に停滯して、有害作用を爲す時、或は有毒物を攝取したる時は是を排除するに必要とするのであります。故に滋養物を吸収せしむるにも藥物を吸収せしむるにも必要缺くべからざるは胃腸粘膜の活力を旺盛ならしむるに適當なる健胃劑の必要となり運動亦是れに伴はねばならぬのであります。

#### 微毒の適薬に就て

古來梅毒の最も適薬とするもの、水銀、ヨードの二劑であります。而して是れを内服に使用する時、胃腸の粘膜を刺戟して消化不良の症因を招く爲、食後に服用せしめ依つて胃壁の障礙を尠からしめんとするのであります。而して水銀劑は第二期第三期の驅微法に適するも、ヨードカリは主として第三期症に卓絶の効を爲すものであります。故に第二期の末或は第三期に入らざれば効を爲さないであります。

水銀劑は第二期第三期共に効ありとするも其内服に到つては、胃腸を損するの害、甚だしきものあれば是れを推奨するに足らざるも水銀を血管中に輸入する道猶三法あり一は軟膏として、皮膚面に塗擦し、是れを毛細管に吸収せしむるもの一は水銀蒸氣を肺臓より吸収を圖るもの、一は水銀劑の皮下注射法であります。而して注射法は素人の直接行ひ得べからざるものあれば、爰には素人の出來得る、範圍に於て説明を省略するのであります。

水銀軟膏の塗擦法は内服藥の如く胃腸を害する事なく、而も其効果は頗る迅速にして且確實なるものであります。其法は規定の水銀軟膏、三乃至五瓦を皮膚の軟弱なる部分に約三十分間擦込を爲すのであります。一日は右上膊の内面、翌日は其左三日は右大腿の内面、四日は其左、五日六日は前膊の内面左右に塗擦し、斯くて

七日に到り入浴に一日を休養し更に八日より前例を繰り返し其回数三十回に達するを適度とするのであります。

而して肺臓に水銀蒸氣を吸収するには前記塗擦中、室内の窓戸を密閉し、温暖なる空氣中に蒸發する水銀を吸収するに努むるのであります。亦水銀を火上に置きて其蒸發を求むるあり、或は綿麻布に塗布して吸収に適する様、胸前に懸垂する等は素人療法として最も適當なるものとすれど總て水銀療法は口内粘膜を刺戟して屢々汞毒性口内炎を招來するにより療養中常に口内の清潔を圖り豫防として鹽酸加里二瓦水百瓦の溶液を以て毎日數回含嗽するを可とするのであります。而して水銀療法による口内炎、或は胃腸の障礙等、中毒症狀を認むる時は其量を減じ或は一時中止せなければならぬのであります。

次にヨード療法は第二期の末、水銀療法と併用し或に互用するも主として第三期症の適薬であります。其使用法は初め沃度加里一瓦を百瓦の水に溶解し苦味丁幾約二瓦を配伍して一日量となし、胃の刺戟を防ぐ爲に食後直に服用するのであります。沃度加里は毎日其量を増加して一週間に五瓦に達すべし、胃の強健なるものに於ては七瓦に到る事を得べし、而して胃を害する物は一時中止して水銀療法を爲し、或は更に二瓦より始め前量を繰返して内服すべき事を得るも、本剤は上述の如く胃腸粘膜を刺戟して消化不良たらむる而已ならず、亦能く中毒性鼻加答兒及皮膚發疹等を招來するを以て中毒症状を認むる時は直に内服を中止し徐に滋養強壯を圖り其恢復を待つて内服薬を用ひるものであります。

近時内服に代る皮下注射として、ヨヂピンと稱する注射薬あり 其効果沃度加里

の内服に異ならず、又水銀劑の皮下注射として、種々なる製劑あり孰れも内服に比して中毒其他の障碍少なき爲、汎く稱用さるゝものであります。されど是等注射薬も體質の強弱病勢の消長に従つて、其用量の加減を必要とするのであります。故に素人療法として適せず。其他静脈内注射法として現今驅微法中最も効果の顯著なるはサルヴァルサン所謂六〇六號にして近時内地製劑に此種の注射薬數種あり、其効毫も六〇六號に劣る處なしとして稱用さるゝのであります。

局處的療法に就て

梅毒は以上の服薬注射に依つて完全に治癒する道あるに猶他人を害し、子孫に累を及ぼすの責、輕からざるものであります。治療一日早ければ一日自己を利し延て子孫を愛する道に、適ふのであります而して局處的療法の一として濕痔に對し、

温療を最も適當なるものと、推賞して憚らないのであります。勿論全身的驅梅毒とする内服或は注射を併用せなければならぬのであります。自家法とする。家傳藥あれど、是又素人の扱ふべき藥品にあらざれば、爰に省略するも前記素人の出來得る驅療法と温療を併用さるゝならば専門家に就くと同一の效果を得る事は確實に證せらるゝのであります。唯注意すべきは夫が爲に胃腸を損せざる事と中毒症狀を認むる時直に中止して身體の恢復を圖り而して後徐に其目的を遂げられん事を望まれるのであります。

濕痔即肛門の周圍或は婦女子の陰部に發生する扁平濕疣或は軟硬混合感染に依る潰瘍に對し行ふ温療の様式は痔核痔瘻と變る處なく創面を清潔となし安永膏を創全面に密着せしめたる後、温療坐藥を壓抵して更に温療器第二號或は第三號の内一種

を定着して禪となし二時間乃至三時間の經過後、全部解放して新に安永膏を貼替へたる後、脱脂綿を覆ひ禪を以て堅く縛し、二三時間毎に膏藥の貼替へを爲し一日二回位の温療を適度とするのであります。

#### 第四章 温療が疣瘡に及ぼす作用

疣瘡の生ずる原因は輕微なる外傷後繼續的刺戟を受けて、反應的に肉芽及脂細胞組織の増殖に基因する事は前章既に敘述する處にして其特異のものを除く外總て簡單なる切除手術に據つて治癒するのであります。

軟性疣は脂細胞組織より成り、主として痔核の尖端に増殖するも時として肛内粘膜炎に發生し、淡黄桃色の稍透明なるものにして第十三回に示す如く平圓細長の桿狀を

爲し、或は其中央部ヨリ二三に分岐するあり、罕には二三寸に長じ宛ら章魚の足を  
 出す如く數條の疣を有する者あり。其淡黄なるは脂胞に富みたるを證し、血管及  
 神經に乏しく従つて其切除は無痛にして且つ非觀血的に行ひ得るを以て毫も危險を  
 生ぜざるものであります。去れど硬性疣殊に肛孔邊緣に發生するものは周圍組織に  
 伴ひて知覺神經を有し切除亦相當の苦痛なしとせざるも更に危險性を帯びざるが故  
 に手術に據つて容易に治癒するのであります。而して肛内粘膜に發生する疣には往  
 々其下層に痔核を抱くものありて一定の注意を缺く時は、出血止みがたきものであ  
 ります。如上の特異性を除く疣としての切除は最も簡單にして殊に周圍組織と區別  
 して突出するが故に其切除は瞬間に了るものにして格別意とするに足らないのであ  
 ります。

硬性疣は軟性の如く全く非觀血的のものにあらざるも觀血微々たるものにして、  
 怖るゝに足らざるも肛内粘膜に生ずるものにして、所謂痔核を抱くものに對しては  
 痔核嵌頓法に倣ひ温療を行ひたる後に手術するを最も安全とするのであります。而  
 して温療が疣痔に對する作用として、特筆すべき格別の効果を有せざるも、豫後の  
 疼痛を緩和し創面を癒合せしむるには各症に於て論述する如く防腐的強き刺戟劑を  
 要せずして癒着を早からしむるものであります。

第五章 温療が痔痔に及ぼす作用

痔痔の症因は皮膚表層に寄生する、所謂微菌の作用にして其物質代謝機能に據て  
 産出する毒素の爲に痒癢を訴へる事は前章既に論ずる處にして、其所謂毒素「トキ



シン」の原質が、蛋白質類似のものにして、一定温度に據つて其毒性を失ふ事は近時外科諸大家の均しく認證するものであります。即五十度の熱には暫時にして有毒作用を失ひ八十度の熱は忽にして其毒性を失ふのであります。

然り而して温療法が炎症性傳染症の、外科疾患に對して奏効する以所は即毒素「トキシシン」を無毒ならしむるからであります、故に痒痔の如き單に表層に存在するものに對しては僅に一回の温療に據つて直に苦痒なからしむるもの畢竟其有毒質を無毒質たらしむるからであります。

而して温療が寄生微菌の背面防禦とする、鱗屑痲皮を融解して先其防禦線を破壊し寄生菌の棲息する根據地を奪收せんとして、外用薬の制防腐劑が幾度か反覆貼用して新に取替へらるゝ毎に其死滅を容易ならしむるのであります。故に温療約二週

間を経續する時、疹下に堅實なる皮膚を作り病皮は自然に剝離して完全に治癒し得るのであります。

### 第六章 腸痔の制脱に就て

腸痔は胃腸の虚損より榮養不良を招き、遂に直腸の脱出を餘義なくする事は前章既に記する處にして其制脱手段として。現今一況に行はるゝ處置は手術に據つて肛門の一部。或は周囲の皮膚組織を切除し亦烙鐵或は烙白金に據つて焼灼し、而して其治癒後の癍痕を利用して脱出を防かんと圖るのであります。

蓋し此癍痕結成を利用する處置は、前章痔核の制脱法に於て説明する如く肛圍の伸縮組織を失ひ、肛孔を固定せしむるが故に軟硬共に其排便時に於て以前に優る苦

痛を訴へるのであります。

肛門は身體自然に具ふる器官にして其伸縮開孔の度は腸と聯絡して毫も過不足を有しないのであります。故に其一部分の缺損たりとも必ず不自然なる缺陷を生じて軟便は自痢し硬便は栓塞する等、所謂自然を損ずるものにして終世醫すべからざる不幸を齎すのであります。

痔瘻の如き切開止むを得ざる場合にも肛圍に自然具ふる伸縮性の組織を切除する事は可及的是れを避けねばならぬのであります。況や單に制脱手段として貴重なる組織を失ふ事は比較相伴はざるものと思惟するのであります。而して其最も安全とすべき處置は適當なる壓抵器を以て脱出を防ぎ可成的其習慣を除く事に注意し同時に食事を改め常に消化爲易き滋養物を攝取して虚損せる體力の復活を圖り一面温

療に據つて刺戟を與ふる時は局所の血行を旺盛ならしめ、物質代謝機能を増進して局所の榮養状態に變化を生じ、而して筋神經の弛緩を復活し自然に脱出なからしむるのであります。

## 附 録

### 温療に要する藥品及器具

- 一、安永痔の藥 一名安永膏
- 一、安水温療藥 一名温座藥
- 一、安永温療器 第一號、第二號、第三號

以上二種の藥品と、第一、第二、第三號の内、孰れか一種を必要とすれど、第一號器は電熱を應用したるものにして専門醫家の使用に適し第二、第三號器は素人専用器にして懷爐灰を使用するものと酒精或はペンヂンを使用するものとあり、而して第十七圖の如く禰と爲し定着するが故に使用頗る簡便にして温療中と雖も多

少身體の自由を得、價格低廉であります。

藥品及び器具の使用法

安永膏は能く揉みたる生漉の半紙亦は布片、脱脂綿等に延べ、而して局處に付着する、分泌物其他の不潔物を拭除したる後に局處に密着する様、貼用せらるべし、此際注意すべきは痔核の嵌頓時にして局處を清潔ならしめんとして、脱脂綿或は紙にて痔核面を拭ふてはならぬのであります。痔核の嵌頓時は脱出部分の表層が壊疽に陥り、其腐敗物が漸次脱離して痔核が減滅するのであります、故に痔核面に付着する壞疽纖維を除かんとして、強て是れを剝離する時は、忽出血を招くのであります。據て痔核面に付着する黒き腐敗物は自然の離脱を待つ外、拭除の爲に剝離せしめざる注意を必要とするのであります。

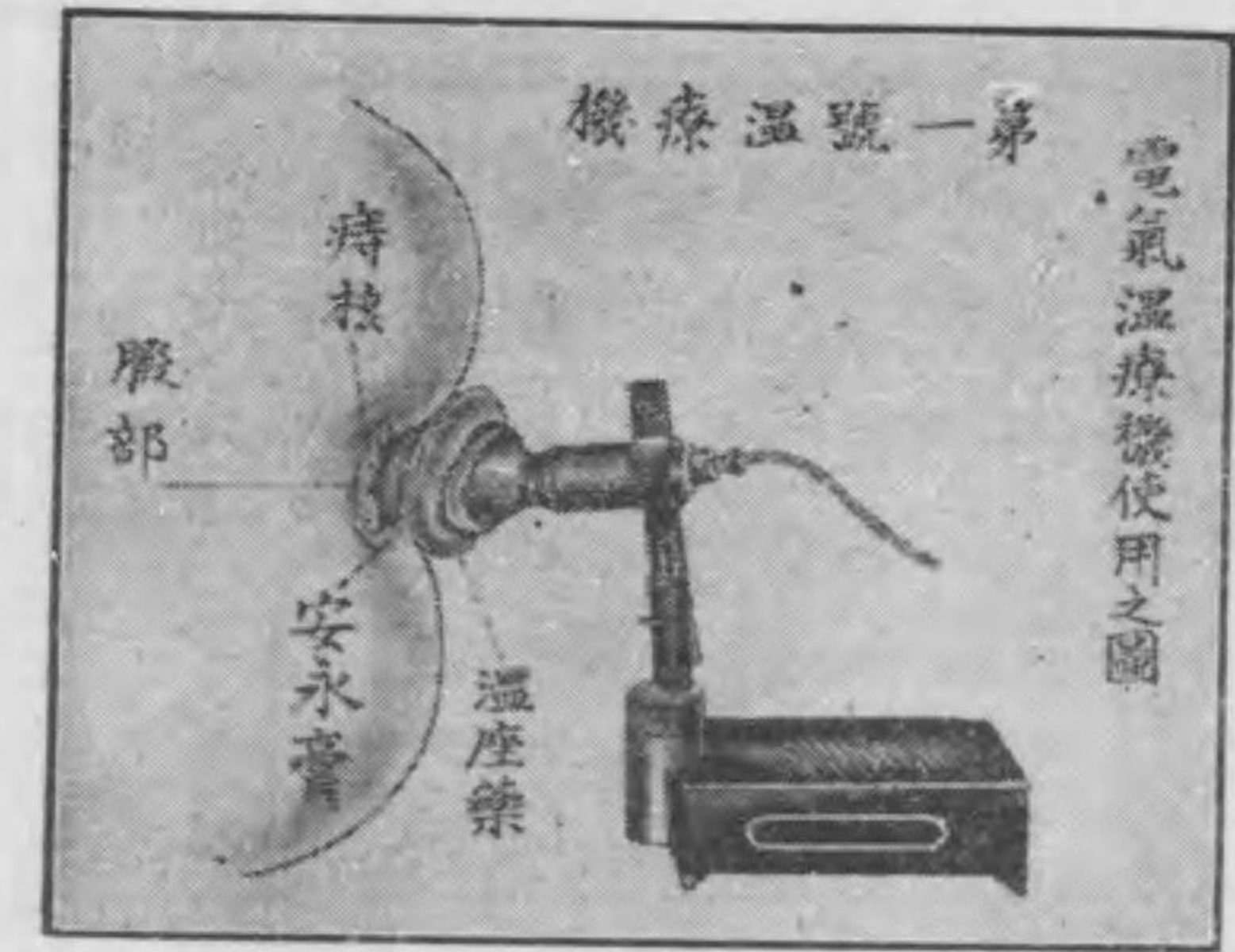
痔核の嵌頓時は粘液或は漿液分泌物が多量滲出して夫が爲局部を冷却され或は刺戟されて疼痛を訴へるのであります、故に膏藥の貼替へには成るべく局所の滲出分泌物を除き、痔核面に付着する腐敗纖維物を強て剝離せざる程度に軽く壓へて、幾度も脱脂綿を取替へ滲出物を除きて後に膏藥を貼用せらるべし。

第一七圖



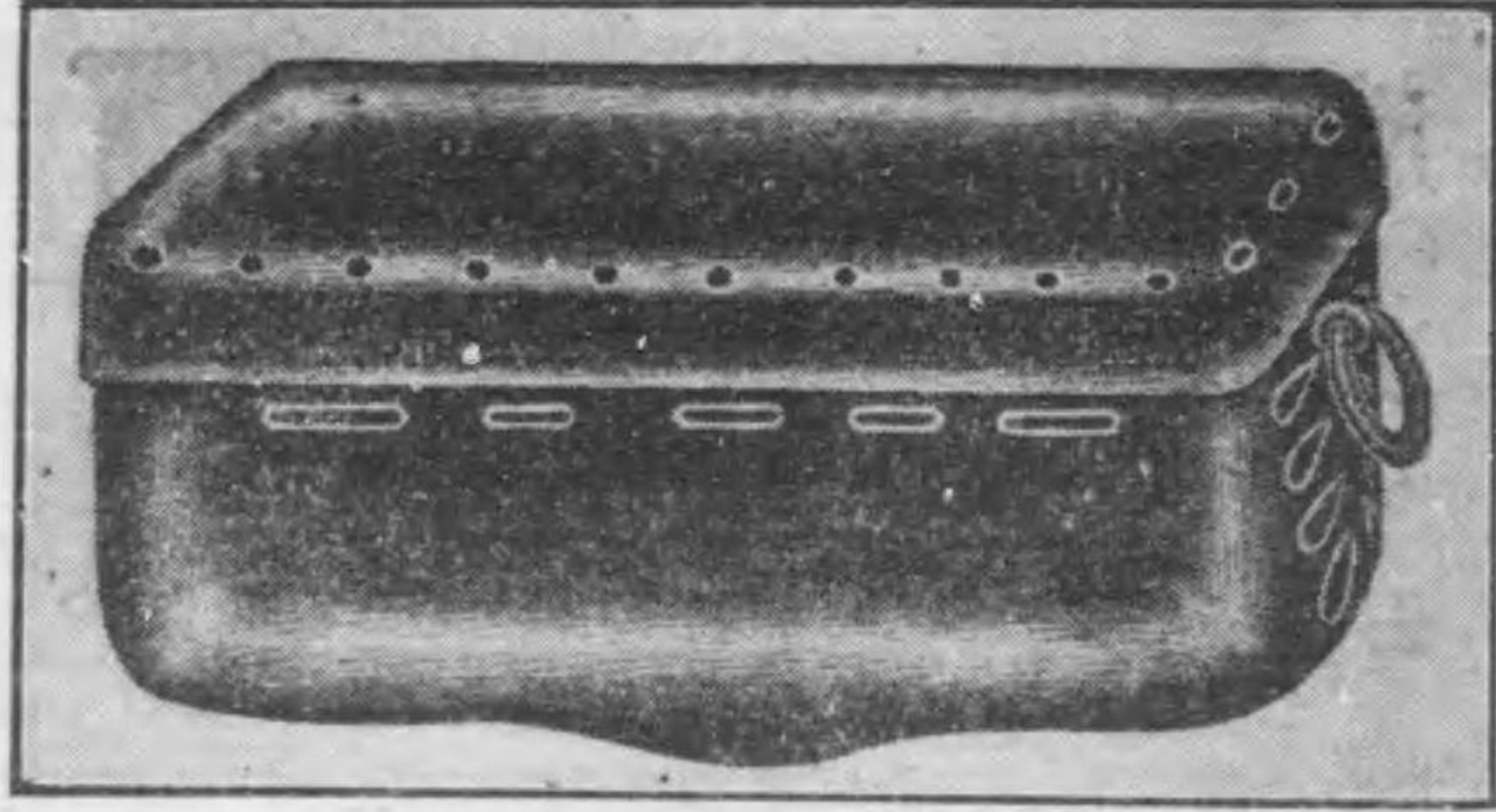
温座藥は一回量を一袋としてあります。少量の温湯を加へて紛末を練り直徑二寸餘厚さ三四分位の扁平なる杜審團子の如き形状となし既に貼用する安永膏の上より痔核面に

密着する様壓抵し、更に温療器の底部を、座薬の中央に位置し、療器に付屬する紐にて禪となし兩足は第十七圖に示す如く、稍々前方に屈して横に寝らるゝを可とするのであります。



熱の調節は座薬の厚薄に據つて其度を測るのであります。若し座薬の練り方軟きに過ぎる時は器具に壓されて薄く成り易いのであります。故に練り方軟き時は更に少量の粉末を加へて加減が出来得るのであります。温度は五十度乃至七八十度を可と爲し氣持よく一二時間の持續に耐へ得る温度を保つ事に

第二號温療器



すは多少痛みを緩和し氣持よしと爲し、殊更ら入浴する者あれど浴後は一層疼痛を

注意せらるべし温療時間は普通二時間を度とすれど頭痛其他、氣分に異常なき限り、三時間位續くも差支ないのであります。而して一日一回乃至二三回行へば疼痛時の苦痛を緩和するものにして疼痛時の温療は他に匹儔すべからざる効果を收むるのであります。

療養中の攝生に就て

痔核の嵌頓時、所謂痔核の脱出せる時、入浴を禁せらるべし、痔核脱出して痛む時、温湯に局處を浸

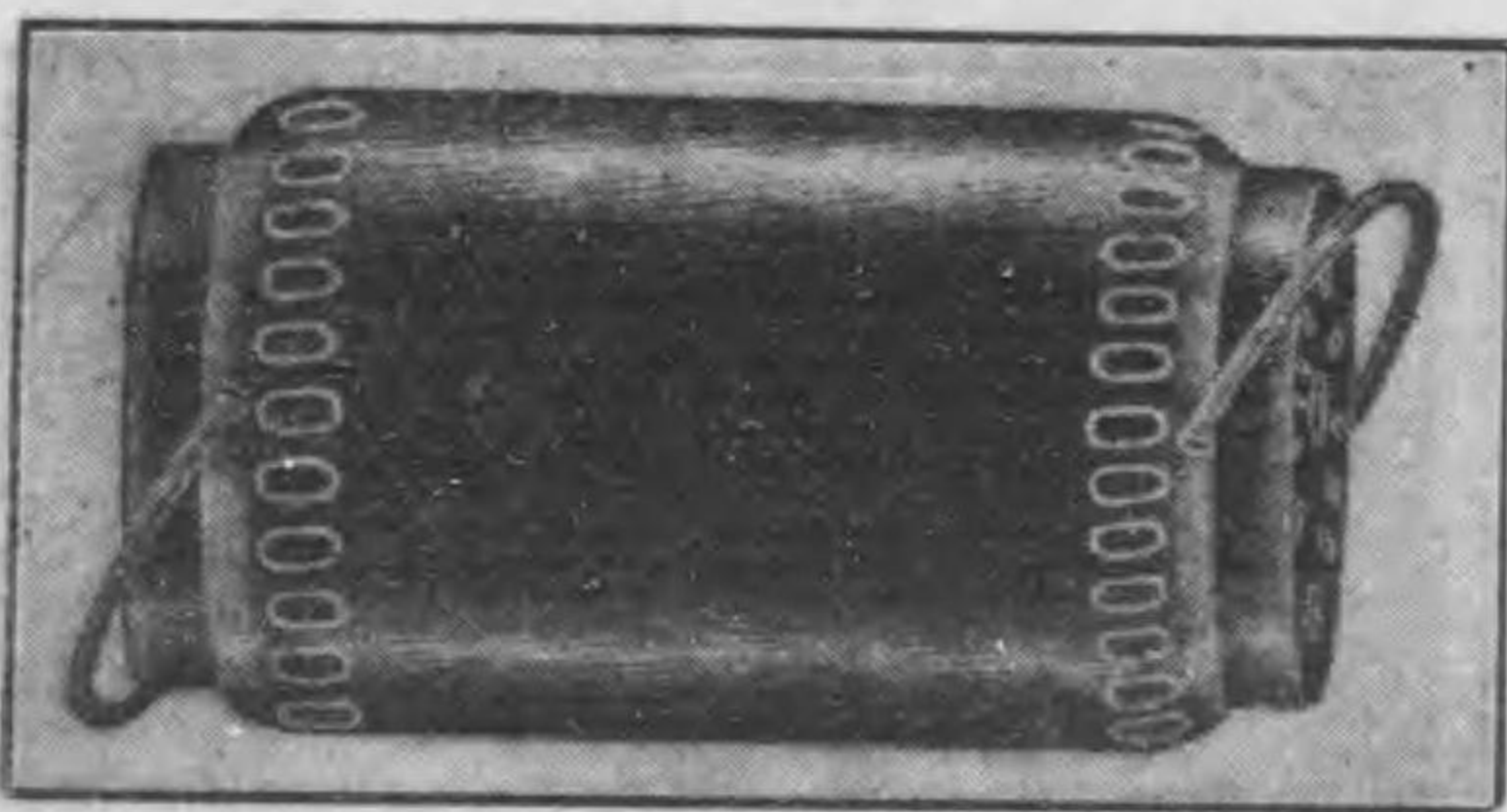
訴へ、而已ならず血行を遮断せんとする嵌頓療法の目的に適はざるものにして従つ

一五〇

て痔核表層に壞疽を爲さず殊に萎縮を妨げるが故に根本療法として此嵌頓療法を行はんとする者には、其目的を遂ぐる迄局處を温湯に浸す事は薬湯たりとも不可とするのであります。

痔瘻に對しては前章既に説明する如く手術開放的にて創内何等の障碍なき、平坦なる創面は肉芽充分調ひたる後に入浴すれば表皮を速成するの効ありされど創内の一部に猶空洞を有し或は表皮の一部殘存して囊狀を爲すもの、或は瘻孔殘存の疑ひあるものは入浴の爲に贅肉を發生し、却て惡結

第 三 號 温 湯 器



果を招來するものであります。故に痔瘻の手術、猶充分ならざるものは成るべく局處を温湯に浸す事を避けるを可とするのであります。

濕痔に對しては前章に詳記する如く其害他人に及ぼすが故に混合入浴を慎しまねばならぬのであります。併して浴後の疼痛最も劇甚なるものにして局處は爲に一層増大し増々不良ならしむるものであります故に其潰瘍に分泌物を認めざる程度に癒合する迄は入浴を不可とするのであります。

痒痔は特に入浴を可とするのであります。入浴は痒疹癬瘡等の痂皮を融解して是れを離脱するが故に外用薬が一層有効に作用するのであります。而して肛内に潜匿する痔核、疣痔、切痔の如きは局處を温湯に浸す憂ひなきものにして、其苦痛も亦主として便通後に感ずるものであります。故に成るべく、便通後に入浴すれば疼痛

一五一

を緩和する事に成るのであります。

食事に就て特に注意すべきは、辛酸の刺戟物であります、辛味が痔に害する事は一汎的に知らるゝも酸類が辛味以上に害する事を知らない方があります。亦酢其他酸性食物を害ありとして避くる事を知るも不消化物其他胃腸を損する食物を攝收する爲に下痢を招來して、酸化液の刺戟を蒙むる者が多いのであります、故に堅き糞塊を出すより軟き下痢の方が一層強く刺戟して痔核が焔衝するのであります、故に脂肪の強き魚肉とか天麩羅類が有害と云ふも脂肪が直接刺戟するにあらずして消化を妨げるからであります。爲に脂肪以外にも消化を害し胃腸を損する様の食事を避けねばならぬのであります。

而して灰汁強き野菜類、酒精含有の飲料の如き血行に變調を來す性質のものは、

局所に充血を招くから、疼痛を訴へるのであります。亦餅胡麻等便秘を招く性質の食物も成るべく避けるを、可とするのであります。

猶特に注意すべきは男女の關係であります、痔核の疼痛時は局處に異常の鬱血充血を來して居るのであります。其鬱血充血が漸次に吸收消散して苦痛を緩和するものであります。此際交接は局部に炎症を誘發して更に充血を招くものであります。殊に痔瘻の如きは、創面を汚染して不良の結果を醸す恐れあれば深く注意を要するものであります。

終りに臨で注意すべきは、痔核嵌頓時の便通であります。痔核が括約筋の緊縛に據つて疼痛する時、排便を如何にせんと躊躇する者多きも、從來肛内に在つて、排便を妨げたる痔核は全部外部に嵌頓して、肛内更に障碍すべきものなし故に便通は

却て容易なるものであります。

一五四

# 痔疾温療法全書終

大正十三年八月一日印刷  
大正十三年八月五日發行

定價金貳圓

不許複製

著者 安永一得  
大阪府東成郡生野村字林寺二二八番地

印刷者 岡本省三  
大阪市西區北堀江御池通一丁目九番地

印刷所 中村盛文堂  
大阪市西區北堀江御池通一丁目九番地

發行所

大阪市東區生玉町六三番地

安永九折堂製藥部

振替大阪六九四九〇



60  
764

終

